

挨 拶

会 長 石 原 啓 資



会員の皆様方にはお変わり御座いませんか？

長きに亘りご無沙汰致し申し訳ない思いを強くしています。

新型コロナ感染状況も下火になり、10月27日オンライン世話人会にて来年賀詞交歓会を三年ぶりに開催することに決定し、2023年1月19日にて日程調整していました。

然し乍ら、11月15日（火）時点で全国新型コロナ新規感染者数が10万人を超え、東京都の新規感染者数も1万人を突破し、第8波の到来が確認され、AI予測では東京都の一日当たり新規感染者数が1月中旬には3万人との数値が発表されました。かかる状況下、急遽11月16日に対面での世話人会を開き来年賀詞交歓会の開催を再検討いたしました結果、会員の皆様方のご健康最優先方針を貫けば中止との判断に至りました。会員の皆様との再会を楽しみにしておりました世話人会としては誠に残念ですが、急激な状況変化をご勘案いただきご理解賜りたくお願い申し上げます。

然し、我々高齢者は感染に対する警戒を継続するべきと思っています。引き続きご注意ください。

世界中で新型コロナ騒動に注意が注がれている隙を狙って、ロシアがウクライナに侵攻し未だに戦闘が続いています。ウクライナの生活拠点の基盤を攻撃し破壊し続けるロシアの暴挙を止める事ができず経済制裁を強めるのみでこの戦争が終わるのか？と大いに疑問を感じています。国連安全保障理事会は、ロシア・中国が拒否権を行使し、結論を出せず機能が果たせない状況では国連の存在価値が問われています。本来ならウクライナに侵攻した当初、ロシア軍を国連軍とNATO軍で駆逐すべきだったと個人的に思っていますが、初戦からウクライナとロシア間の戦争に西側諸国は後方支援に限ったことが、プーチン大統領に無用な自信を与えたと感じています。消耗戦が続くのでしょう。核の使用にエスカレートせぬことを祈るのみです。

ロシアのウクライナ侵攻の行方に不安は募りますが、先日閉幕した中国共産党大会にて慣例破りの三期目に入った習近平体制に大いなる不安を感じています。経済優先にて国力を向上させ世界第二位のGDPを確立し、後は米国を追い越すのみと表向き順調に思えましたが、国内では可成り齟齬が生じ、軋みが出始め経済成長を犠牲にしても「中国共産党安定」をスローガンとして国民をまとめ上げる独自路線を進めるべく側近を全て「Yes Man」で揃え権力を集中させ強権を実行すると思います。中華民族統一のもと、香港の次は台湾統一を最優先課題にし、武力行使も辞さずの構えです。日本のお隣で一戦交えられると日本が傍観することはできません。斯様な事態を招かぬよう、独自の外交ルートを確保し習近平氏といつも会話できるような環境を整えるべきでしょう。ロシア・ウクライナ間の戦いの現状見れば弾が飛んでからでは手遅れです。

先日、NHKで日中国交正常化50周年記念番組を視聴し、田中元総理が中国に出向く前に自

由民主党内で国交正常化の了承を得て訪中したと理解していましたが、一部の側近のみに知らされ訪中後、自由民主党内で事後報告の際に騒動になり青嵐会が台湾との関係維持の主張に対し「世界の現状の流れを熟慮すれば中国との国交正常化は正しい」と言い切り反対意見を封じ込めた姿勢を拝見し、天下国家を考慮し腹を据えて決断する首相の言動には大いに励まされました。斯様な国会議員が現状いらっしゃるのか・・・？ 些か疑問です。

日本国内に目を向けると、円安が進み大騒ぎで訪日外国観光客が喜んでいる様子が日々ニュースで報じられています。三十何年振りの円安と言われていますが、平均給与額も三十年間横ばいと報道もされていました。一人当たりのGDPも韓国に抜かれ、過去三十年の間でバブル崩壊の後始末に時間を割き、後ろ向き姿勢で長年時間を費やしたことの弊害が表面化したのではと思います。魅力がない日本になり下がった実態を今の円安が示していると考えます。生産効率を最優先し生産性の向上を目指すと共に、衰退が懸念される既存産業を縮小させ新しい成長産業に積極的に挑戦する前向きな社会構造が不可欠と思われれます。物価上昇の現状、国民に現金をばら撒きその場凌ぎの対策に集中しすぎているのではと思います。輝かしい未来が期待できる社会を作るべく政府が積極的に取り組んでいないことが日本経済の衰退を放置しているのではと思います。人口減少も改善せず、円安で母国への仕送りが目減りする外国人労働者が日本以外での働き口を探している現状、危惧される将来の更なる労働者不足を解消するには、教育の強化、行政機能のデジタル化の迅速な促進で、人間と機械の棲み分けを明確にして生産性を最優先に謳歌できる社会作りが不可欠でしょう。

斯様な厳しい環境下でも、双日株式会社は人材育成に注力され順調に業績を伸ばされ、2023年3月期連結純利益を1,100億円に上方修正され、藤本社長様が常日頃仰っていた純利益1,000億円越えが現実になりました。誠に頼もしく喜ばしい限りです。益々の業績拡大をお祈りいたしております。

我々社友会もこの三年間コロナ騒動で活動を手控えざるを得ず、会員の皆様方にお寂しい思いをさせたことこの場をお借りしてお詫び申し上げます。世話人会全員初心に戻り社友会の更なる発展に注力して参りますので、社友会発展のため幅広いご意見を賜りたくご協力お願い申し上げます。

最後になりましたが、来夏の総会開催日を7月11日（火）又は7月13日（木）で会場を予約しています。皆様方との再会、及びご健康をお祈りし、私のご挨拶といたします。

以 上



会報32号に記載の「決議事項」の賛否について

2022年9月30日

本会の各年度における事業報告、収支決算報告、及び監査報告は、例年であれば総会の議題として議事かけられたうえで、出席者の多数決により承認を受けるべき事項ですが、今年は世界的な新型コロナウイルス感染症対策の影響を受け、7月中旬に開催予定だった総会が中止を余儀なくされたため、「2021年度事業報告・収支報告(案)、2022年度事業計画・収支予算(案)」及び「2021年度監査報告書」は、本年8月8日に発行された会報32号に議題として掲載されると共に、会報に同封された返信用はがきの返送により、この議題に対する会員各位の賛否を投じて頂くこととなりました。

その返信はがきの回収結果を、以下の通りご報告致します。

- 1) 発送枚数 (2022年6月30日現在の会員数)…………… 409枚
- 2) 回収枚数 (2022年9月30日現在)…………… 208枚
- 3) 回収分のうち、決議事項に賛成(同意)された枚数…………… 208枚
- 4) 回収分のうち、決議事項に否定(不同意)された枚数…………… 0枚
- 5) 回収分のうち、決議事項に関し、無回答だった枚数…………… 0枚

従って、上記3)の賛成数は、有効投票数(回収枚数)の過半数となりますので、本決議事項は承認されました。

会員の皆様には、多大なご協力を頂き、誠に有難うございました。

ニチメン東京社友会監事
蛭田恒美
大羽陽一郎



2023年 長寿者お祝い対象者(敬称略)

白寿 (1925年生まれ) 1名
岩居宏一

米寿 (1936年生まれ) 22名

泉伸夫、岡島岩男、沖田隆彦、小野賢次、小野稔、北川嘉雄、喜多嶋雄徳、金城弘明、倉持次雄、黒木俊二郎、菅沼利太郎、芹生宏、高瀬允宏、中原正紀、西川洋、庭野松三、長谷川洋、堀田恒雄、本田務、本松巖、山本昌裕、吉野昭一

なお、大変恐縮ですが対象者の名前に漏れ等不手際があれば至急世話人へ連絡願います。



会員寄稿文

コロナ禍と読書
ユリウス・カエサルの「ガリア戦記」と「内乱記」

竹 内 可 能

先日近在の昔仲間4人に限って、コロナ禍にもめげずミニ集会（飲み会）をやったときのことだ。わたしがこんなコロナ禍の時節でもなければ、決して手つかずだったはずと断りながら、今ユリウス・カエサルが書いた「ガリア戦記」を読んでいると告げたら、仲間のひとは驚いて云った。いまどきそんな本を読んでいるのは何処にもいないだろうなど。

こんな古臭くてこむつかしい本は、たしかにその筋の研究者とか学者ならいざ知らず、素人の読者には無用の代物である。そのとき本当はカエサルの「内乱記」も一緒に読み合わせていたのだが、わたしは云いそびれてしまっていた。この二冊はいまから丁度15年前になるが、わたしの好きな「ローマ人の物語」（塩野七生著）にひかされて、二冊とも買い込んだものの、それ以来“ツンドク”のままになっていた。

この歳になってみると、全くあたらしい小説とか評論を手にするに抵抗感を覚える反面、昔読んだものとか買い入れた本の中から、もう一度手にしてみたい衝動を感じさせるものが結構あるものだ。前々号に寄稿した「フリードリッヒ二世の物語」もその中の一冊であった。なにを隠そうあの寄稿文を書いたとたん、わたしはなぜか「ユリウス・カエサル」という、これまたもう一人の歴史上の大人物にとりかかって見なくなっていたのだ。

実はあの「フリードリッヒ二世の物語」を再び読み終えたとき、わたしは著者の塩野七生はなぜ「ユリウス・カエサルの物語」を書かなかったのか、一瞬疑問に思ったの

だがその理由は直ぐに解ける。考えてみれば当然のことだ。彼女はユリウス・カエサルのことなら、とっくの昔、あの「ローマ人の物語」のなかで思いの丈を描き切っていたのである。今度わざわざわたしは調べてみたのだが、彼女は浩瀚な「ローマ人の物語」のなかの、およそ五分之一にわたるスペースを、カエサルの記載につき込んでいたのだ。それもルビコン以前と以降にわけて、カエサルの行状と思想を、彼女自身の感想をたっぷり織り込みながら、実に細々と書き尽くしている。

ローマ人の歴史といえば、一口でいうとその始原は紀元前753年にさかのぼる。それはともかくとしても、帝政を切りひらくことになるカエサルに時代（彼の暗殺は紀元前44年）から数えても、西ローマ帝国の滅亡が476年だから、この帝国の歴史というならおよそ500年と考えてもよかろう。しかし塩野七生が描く「ローマ人の物語」は、ポエニ戦役あたりから書き起こしているので、それを700年ぐらいと考えてもよかろうかと思う。いずれにしても彼女は上述のように、この物語の五分之一をカエサルという人物に充てているということは、彼女が如何にカエサルに入れ込んでいるかが知れようというものだ。

話を先述の「ガリア戦記」と「内乱記」に戻そう。繰り返しになるがこんなコロナ禍のご時世でなければ、いかなわたしでもこんな覚書ふうの、こむつかしい書物に手を出すことはなかったろう。とまれ、わたしはもう一度「ローマ人の物語」を読み返しながら、併せて「ガリア戦記」と「内乱

記」に、つまりはユリウス・カエサルという男に、挑戦してみる仕儀とは相成ったのである。

わたしにとっての、そんな「ガリア戦記」と「内乱記」ではあったが、15年前に一度は読み通した（と思った）、「ローマ人の物語」を読み返してゆくうち、著者のカエサルに対する激賞に、自分もだんだん取り込まれていくのが分かって来る。彼女はこれでもか、これでもかと言わんばかりに、カエサルにたいする賞賛の眼をもって「ガリア戦記」や「内乱記」を引用する。本当のところは、このわたしもまたカエサル自身の手になるこれらの手記を、実地検分しなければと思いついたのが実情でもあった。

カエサルのことについて書く前に、一言「ローマ人の物語」の著者である塩野七生について、敢えて申し上げておきたいことがある。それは彼女が未だに文化勲章の榮譽に浴していないことだ。わたしに言わせれば、彼女こそこの勲章を受章する資格は十二分にある。わたしは戦後間もないころ、評論家として日本の知識階級の前に颯爽と現れた、小林秀雄のことを想い出している。あの時ほどのインパクトには及ばないかもしれないが、塩野七生もあれに匹敵する影響力を否定できないのだ。

それなのにまだ受賞していないという不幸な理由は一体何なのか。わたしはその根底に、日本人特有の女性蔑視か、さもなければヨーロッパ文明にたいする軽視が潜むのではないかとみている。以上は余談ながら、わたしを憤慨させている問題ではある。

さて、古代ローマが生んだユリウス・カエサルとは、一体何者だったのか、それをここに一言で表すのは難しい。それをするには、少なくとも塩野七生の「ローマ人の物語」の、カエサルがルビコンを渡る前後を通読願う他はない。一言で申せばという但し書き付きなら、共和制時代の古代ロー

マ史では今や著名と言われる、モムゼンという歴史家のカエサル評をここに記す、曰く「カエサルはローマが生んだ唯一の創造的天才である」と。

どうやらこの評価は今日定着しているようだが、敢えて言わせてもらえれば、カエサルの創造的天才をいうなら、鳥瞰的な古代ローマ史上の歴史的な偉業と、カエサルというパーソナルな資質と二つを分けて考えてみたいのである。

まず第一のカエサルに帰すべき歴史的な偉業として特筆すべきものに、二つあると思う。その一つは、云うまでもなく彼が成し遂げたガリア征服である（実際には今日の全フランスとオランダ、ベルギーの一部、それにドイツ南部地方）。

時に紀元前58年から51年にわたる8年間のことであった。彼がいわゆる一年任期の執政官を終えたのち、北イタリア（当時はルビコン川以北ピレネー山脈に至るまでの地域）と、南仏（今のマルセイユ地方）双方にわたる属州の総督時代であった。実際のところガリア征伐は元老院の正式許可もとらずに、独断で進めてしまった事業ではあった。8年間という長い間、雑多な部族を相手の戦闘につぐ戦闘の結果、ようやくしてカエサルがもぎ取ったガリアと言えた。

彼が「ガリア戦記」をなぜ書き残したのかといえば、ローマの市民集会と元老院対策としての一部始終であり覚書だったことがよくわかる。つまりカエサルとしては、これら二つの政体というべき組織にたいして、たしかな自己弁護と宣伝の必要性を痛感していたはずだからである。「ガリア戦記」は、結果としてなら、目論見通り大多数の市民による、彼が成し遂げたガリア征服への、熱狂的な凱旋をもたらした。しかしその市民も、まさかこれがローマ内乱とカエサル暗殺という、歴史的な悲劇の始まりとは思ってもよらぬことだったろう。

それにしてもだ。今から云えばおよそ2、100年近くもの昔の、このガリア全土の属州化こそは、カエサルという男の創造的天才を措いて考えられないのである。

もう一つが、これもカエサルが創造的天才であったことの所以ではあるが、まさに革命的といってもよい、いわゆる古代ローマの共和制から帝政への脱却であった。もともとの共和制は紀元前一世紀前くらいまでなら、そこそこ機能していたと言われている。しかしカエサルの時代ともなると(紀元前一世紀を越したあたりから)、近隣属州の肥大化と相まって、市民集会の形骸化やら元老院の保守化・強権化によって、寡頭政治自体に行き詰まりをきたしていたのだ。とりわけ市民集会に代表される民衆派と、元老院守旧派との対立は、深刻な事態を迎えていたのだ。

創造的天才につながるカエサルの先見性はつとに有名だが、彼はこの古代ローマの政治的行き詰まりの打破に注目したのである。

因みに古代ローマの共和制について少しく触れておく必要がある。一言でいうなら、この制度の根幹は元老院と市民集会、それに二人の執政官から成り立っている。しかしこの制度は寡頭政治とも呼ばれるように、上述のように執政官は一人ではなく、年に二人が選挙で選ばれること、さらには共に任期は一年限りであることや、一度選ばれるとその後十年間は被選挙権をみとめられないという制約があった。

こうしてカエサルが起こした古代ローマの帝政化は、カエサルの暗殺という凄惨な事件と引き換えではあったが(紀元前44年3月15日)、やがて彼自身が遺言した後継者のオクタヴィアヌス(後の皇帝アウグストゥス)によって開花することになる。

因みに彼が書き残した「内乱記」は、カエサルが意を決して(賽は投げられたと)、

ルビコン川を渡ったときから、敵将ポンペイウス(彼はギリシャの地ファルサルスの会戦でカエサル軍に完敗)を追撃して、エジプトのアレクサンドリアにたどり着くまでのことが(彼はその地でポンペイウスの非業の死を聞かされる)、きわめて客観風に記されている。紀元前49年1月から同48年10月までの、2年足らずのことであった。この「内乱記」は書かれたのは前47年頃、彼のエジプト滞在中とされるが、実際に日の目を見たのはずっと後日のこととされている。理由は宿敵ポンペイウスを葬り去った上は、政治権力は一手にカエサルに集中し始めていたから、先の「ガリア戦記」とはちがって、市民集会とか元老院対策が不要になっていたことと無関係ではなかったからであろう。

さて、ここでカエサルという男の、一私人(パーソナル)としての特質について考えてみよう。これを一言で表すならこんな風に見ることができるのではないか。つまり、カエサルはこの言葉の上に「超」と冠せられるほどに、「合理主義者」であったことだ。これはどうやら今昔の歴史家や研究者の共通の見解と考えてもよさそうである。しかし彼が並の合理主義者とちがうのは、まず彼が当代一流の知性人であり、且つは教養人だったことを挙げなければならない。たとえば、塩野七生自身も云うように、曰く「紀元前一世紀のローマの最高の教養人といえば、キケロとカエサルだったとする説があるが、わたしもこの説に賛同する」と。

さらに彼の特質として、加えておかなければならないことが二つある。その一つは彼が教養人であるとともに、当代きっての弁論人であることと、ずば抜けて文章力に長じていたことである。もう一つ、見落としがちではあるが大切なファクターがある。それはまさに彼の貴族体質と虚栄心であった。

問題なのはこの貴族体質と虚栄心である。これはわたしの想像だが、おそらく彼の晩年はこの貴族体質と虚栄心が高じて、元老院の議員たちの多くを敵に回してしまっていたのではないか。そうとでも考えなければ、あのマルクス・ブルータスやカシウスをはじめ、14人もの元老院議員たちの凶刃による暗殺など、到底考えられないのである。

そもそも前述した超合理主義にしても、それを支える知性にしろ教養にしても、或いは弁論・修辞にしても、それらは全て彼の創造的天才を発揮する手段でこそあれ、これを妨害するものではありえない。しかし彼の特性に潜んでいたと思われるものに、優越主義（他者に対して圧倒的な優越感を抱こうとする）があったとしても不思議はない。それは以前なら彼特有の知性や教養によって、適当に抑え込まれていたのだろうが、晩年の彼が独裁官として活躍するに及んで、下衆な優越主義も彼の超合理主義の餌食に成り下がってしまったのではなからうか。実際問題としても、宿敵ポンペイウス亡き後は、万事に天才的なカエサルの前で、彼の右に出るような者は、政治の世界でも軍事の世界でも、いなくなってしまういたのである。

しかし作家の塩野七生はあまり暗殺の真の原因には触れたがらない。もっとも彼女はどこでか自分の著作の中でも言っている。地上の万物は、すべからく崩壊し滅亡するのが自然というものだから、そこをとやかく云々するのは自分の趣味ではない。それに控え万物が勃興する姿こそ見ものであり断然面白いと。

彼女もまた、カエサルが常々言っていたという、「人間ならだれでも、現実のすべてが見えるわけではない。多く人は自分が見たいと欲する現実しか見ていない」、この言葉に忠実な作家だったと思われる。

丁度こんな一文をものしている最中だった。わたしが購読している朝日新聞の9月18日朝刊だったが、そこに掲載されていた評論「ついでた帝国の幻影」にわたしは注目した。この記事はNew York Timesのロス・ドウザットとかいうコラムニストが書いた評論の転載であった（原文はNYタイムス9月4日付き電子版、これの抄訳という）。

その骨子は、当節のアメリカによるアフガンでの失敗を古代ローマ帝国になぞらえて、ローマの将軍たちによるメソポタミアの砂漠やドイツの森での敗北が、ローマ帝国の崩壊・滅亡につながったことを想起している。

実はこのわたしも、この一文の書き起こしを思い立ったときから、現代のアメリカの自由や民主主義の著しい衰退を思うあまり、これを古代ローマ帝国になぞらえてみたい衝動を感じていた。がしかしそれは思いとどまった。下記にその理由を申しあげながら本稿を脱するとしたい。

ギボンという学者の著した「ローマ帝国衰亡史」などを繙くまでもなく、古代ローマ帝国のもととはといえば、前述したようにユリウス・カエサルという不出世の天才男が、ガリア諸部族どもとの戦闘の結果、8年もの年月をかけてもぎ取ったガリアの地を属州化（今でいう植民地化である）したことだった。

そのローマ帝国の衰亡というなら、今やそのローマ軍だったものが、あれから凡そ500年後まさにそのガリアの地で、その昔から北方蛮族と擲擧され続けてきたゲルマン系の諸部族（フランク族や西ゴート族、など）に、とって替えられたということであった。カエサルが征服し、属州としてローマ帝国の傘下と見なされてきたガリアの地は、今や傘下どころか敵対するゲルマン系諸族が浸食の（フン族に押しやられた結果ではあったが）、虫食い状態に陥っていたのだ。

ここに塩野七生を引用するまでもない。

帝国が帝国である所以は「傘下に置いた諸民族を支配するだけの軍事力を持っているから帝国になるのではない。傘下にある人々を防衛する責務を果たすからこそ、人々は帝国の支配を受け入れるのである」と。

話をアメリカ合衆国に戻そう。最初にお断りして置きたいことがある。それはアメリカという国は、歴史上あとにも先にも帝国であったためしはない、という事実である。先述のNYタイムスのコラムニスト氏が書いたとされる一文では、題名も「ついでた帝国の幻影」とある。「幻影」とあるからには、結果的に現実ではなかったにしても、この筆者が（或いはアメリカ人か）夢に描いていたのは、「帝国」だったことは確かなことであろう。

第二次世界大戦後のことである。超大国と自他ともに認めるアメリカが敢えて挑んだ戦争は、いずれも世界を揺るがすような大掛かりのものだった。朝鮮戦争にはじまり、ベトナム戦争、イラク戦争、そしてアフガン戦争である。ここに敢えて申し上げるとすれば、これら数々の戦争に共通して見てとれるのは、アメリカという国の、まるで帝国と見まがうような傲慢と過信ではなかったろうか。偶々わたしが先日新聞紙上でみかけたコラムニスト氏の帝国論の端はしにも、わたしはこのようなアメリカ人特有の傲慢と過信を見過ごすことはできなかったからである。

おわりに臨んで、これも塩野七生の受け売りだが、司令官ユリウス・カエサル将軍の逸話一つ。そういえば、カエサルの箴言の一つに「弁舌（文章）は言葉で決まる」というのがある。カエサルという男が、ひよんな弁舌一つでも如何に言葉を大切に選んでいたかが、分かつという好例である。

有名なファルサルス（ギリシャの地名）の会戦で、宿敵ポンペイウスに大勝利をおさめた後（紀元前48年）、カエサル将軍が

一旦イタリアに帰国したときのことだ。その彼は第十軍団を子飼い中の子飼いと自負してきたが、その兵士らはカエサルの帰りを待ち構えていた。彼らはカエサルがポンペイウスの残党を退治するため、自分たち兵士を引き連れて、間もなく北アフリカ（今のチュニジア）に繰り出す予定を知っていた。しかしカエサルもまた、この軍団のなかに不穏な空気のあることに気付いていたのだ。多分彼らはカエサルがポンペイウスに勝利して、気をよくしていることに乗じて、有利な条件で戦に出かけようと駆け引きを狙ったのではないかと想像される。

それを知ったカエサルが取った行動は、早速兵士たちを前にした得意の演説である。彼が兵士たちに呼びかけたのが「市民諸君！」という言葉だったのだ。普段なら兵士たちには必ず愛情を込めた、「戦友諸君！」が決まり文句の呼びかけだったのである。この呼びかけの言葉のちがいの重大な意味は、カエサルは最早兵士たちを、軍人とは考えていないので、アフリカまで戦に向かう必要は認めないことを、明示していることである。困惑をきたしたのは兵士たちの方だった。とどのつまりは、カエサルに詫びを入れ、あげくにの果ては懇願までして、アフリカに連れて行ってもらうはめになったのは、第十軍団の兵士たちだったのだ。

（おわり）

会員寄稿文

ミステリ小説断想(15)

福 富 直 明

ニューオリンズはアメリカで最も風変わりな街だと思う。特異な歴史と風物、慣習、人種の混合など話題性の豊かな土地だ。文芸作品で言えば、テネシー・ウイリアムズの『欲望という名の電車』（“A Streetcar Named Desire”）が一番有名。1960年代は電車ではなくて、行く先が欲望と表示されたバスが走っていた。たぶん、今でも走っている。Desireというのは市内の地名である。市内のフレンチクォーターと呼ばれる一郭にはバー、ジャズホール、画廊、土産物屋、骨董店、ストリップ小屋が並んでいて、いつでもお祭り気分だった。昔、鉄鋼メーカーの出張者を連れて行ったら、店並みを見て、あっ、浅草だ、アメリカの浅草だと叫んだ。バーボン・ストリートもこの一郭にある。

米南部のこの街を舞台にしたミステリ小説も20冊以上邦訳されている。女性作家のジュリー・スミスの作品に商工会議所の会頭クラスの白人夫婦のところに若い黒人の娘が訪れて、ごたごたするストーリーがある。会頭が黒人女性と関係してできた娘が現れたのだと周囲も（読者も）推測するが、結末でその黒人娘は白人夫婦の実の娘だったと明かされる。会頭の何代か前の先祖に黒人がいて、ダーウィンのエンドウの遺伝法則が作動したために一騒動持ちあがるという筋で、いかにもニューオリンズ作家らしい着想だった。

J・スミスは「この街は肝臓を害し、血を毒する。絶え間ないアルコールとコレステロールの摂取のせいで、体は蝕まれ、蒸し暑い気候がとどめを刺す」と言っている。これはニューオリンズがおいしい食べ物のある亜熱帯だという意味だ。比較的低価格

なのに、おいしいのはジャンバラヤ、ガンボ、オイスター・サンドイッチ、生牡蠣、茹でたザリガニなど。他方、創業1905年のガラトワールは超高級フレンチレストランで、かなり最近までクレジットカードはお断り、予約は受け付けず、客は先着順でしか受け入れない頑迷な接客で有名だった。ミンクの貴婦人も店の外の路上で待たされる。上院議員も並んでいたらレーガン大統領から電話がかかってきて、列を離れ、電話をすませてからまた列に戻ったというエピソードが残っている。エルモア・レナードの小説でヒロインが「うちのパパに頼めば並ばずにいつでもガラトワールに入れてもらえるわ」という。この店に並ばずに入れるのは、ステータスシンボルらしい。ヒロインのパパは上院議員よりも格が上だった理屈になる。ヒロインは「パパはK・ポールにも並ばずに入れる」という。K・ポールは貴族的なガラトワールと違って、グンと庶民的だが、予約を受け付けず、アメリカでは珍しくお相席で座らせ、お一人様15ドル以上ご注文下さいと強気だ。この店の看板料理がBlackened redfishと呼ばれる厚切りの魚肉にバターを塗り、赤唐辛子、黒胡椒その他スパイスをたっぷりまぶして、灼熱したフライパンで、裏表、黒くなるまで焼いた一品である。これを料理名だと思わず、「黒焦げのアカウオ」と訳した翻訳家があった。K・ポールのおかげでblackened cookingが有名になり、blackened alligatorを食べさせる店もあった。アリゲーターは近くの沼沢地で獲れるから、南部では珍しい食材ではないようだ。

J・スミスの小説の中で、刑事がレストランのNapoleon Houseで特製サンドイッチ

を食べる。この店は、セント・ヘレナ島に島流しになったナポレオンを救出してニューオーリンズに迎えようと計画し、市長だった男が自宅を改装して、受け入れの準備をした家だという歴史がある。1820年代のニューオーリンズにはボナパルティストが多数亡命していた。ナポレオンの病死によって、計画はつぶれたが、両角良彦の研究書『セント・ヘレナ落日—ナポレオン遠島始末』によると、「これが最も可能性のあった救出計画」だったとのこと。もしもナポレオンが健康で、アメリカに移住していたらと想像してみてほしい。アメリカはどうなっていただろう。

昭和24、25年ごろだったか、古本屋で見つけたアメリカの雑誌を見ていたら、“Dinner at Antoine's”という小説の広告が載っていた。評判の小説らしい。あの頃は、まだ語尾のアポストロフィ・sの意味を知らなかったから『Antoine家の晚餐』という題名だと思っていた。それから十数年後、Antoine'sが創業1840年のニューオーリンズの高級フランス料理屋だの名前だと知った。アメリカでの最古のレストランの一つだと言われる。

『アントワヌ・レストランでの晚餐』は女性作家フランシス・パーキンソン・キーズが1949年に発表し、数百万部売れた小説、しかも、ミステリ小説だったという。これには、まごついた。アメリカのミステリ小説については研究書などかなり読み漁ってきたつもりなのだが、この小説に関するコメントに出会ったことがない。『アメリカ探偵作家クラブが選んだミステリBEST 100』という本では200冊ほどの作品名が挙げられているのに、そこにも出てこない。端的に言えば、ミステリ小説のジャンルでは、完全に無視されている。どうやら、1940年代のニューオーリンズの由緒ある上流階級の暮らしぶりや風俗が詳細に描かれているのが魅力で、ベストセラーになったらしい。この店も他の作家たちの作品に頻繁に登場

する。メニューのほとんど全文がフランス語だから、行くなら事前の下調べが必要。もっとも、ウェイターが楽しげに説明してくれるが。

朝食なのに3時間かかるという評判のBrennan'sもあるし、Café du Mondeはほとんどの作品にも出てきて、刑事も犯人も弁護士もこの店のベニエ（beignet 四角いドーナツ）とカフェ・オレの手軽な朝飯を楽しむ。

スミスに限らず、土地っ子の作家たちは実在するレストランを作品の中にしきりに登場させて、地元の観光産業に貢献しているのが面白い。日本の作家は概して実在する店の名を出さないのと対照的だ。

もっとも、故藤田宜永氏の作品では、私立探偵が麻布十番の「大越」で昼食を取る。「大越」は実在する洋食屋で、私の家から近いので、いつか飯を食いましょうと藤田氏と約束していたのだが、実現する前に彼が他界してしまった。彼はこの店のうどんみたいに太い野菜炒めスパゲッティとコーヒーが好きだったと聞く。

ジョン・クラークソンの『無法地帯』という小説で、主人公がハワイ島のレストランの「ヒューゴー」に行く。料理は「少なすぎるサラダ、油っこ過ぎるフライドポテト、焼きすぎの鯖ステーキ」だったという。わざわざ店の実名を出したのは、作者の恨みがこもっているように思える。

香港を舞台にしたミステリ小説となると、数十冊を超える。ニューオーリンズの場合は地元の作家が主だが、香港だと、日本の作家はもちろん、英・米・独・仏・豪など外国勢の作品が多く、地元の作家で邦訳されているのは、いまのところ、陳浩基と莫理斯の二人だけ。海外の作家たちは旅行者の視点で観るから、かなり辛辣な観察もある。その昔、香港島の南側に水上レストランが何軒もあり、中でも古代中国の宮廷を模した店の外観はみごとなもので、大藪晴彦は「二層になった楼閣の上に、チャイニーズ・

テンブルを模した館が載っている…趣味の悪い竜宮城に思えた」と述べ、山村美紗は「サンパンが行きかい、目の前に、きらびやかにイルミネーションが光を放つ、レストランが現れた、まるで不夜城のようである。《珍宝海鮮舫》《海角皇宮》《太白海鮮舫》などの字がみえる」と書いた。ジェラルド・ド・ヴィリエは1968年の‘Les Trois Veuves de Hong Kong’の中で《シー・パレス》(=海角皇宮)を「装飾だけでも百万香港ドルかかっている…常軌を逸した悪趣味で金泥また金泥、無数の竜たちは大天使ミカエルさえうんざりさせるほどだった」と描き、主人公は「食事の質に幻想を抱かないで、古典的なメニューを選んだ。《シー・パレス》はどう見ても美食家の殿堂ではなかった。脂っぽくてまずそうなツバメの巣のポタージュ…つづいて鮮度の不足を隠すため濃いソースをかけたうみざりがに」と書き「お茶だけはおいしかった」と痛烈な一言を付け加えている。陳舜臣の1969年の短編には「ばかばかしいですよ、なにを食べても陸上の二倍ですからね」と出てくる。さらに「まずい、サービスが悪いというのが定評…パッケージ・ツアーなんてものは安い

値段で設定されていて、団体客用の安い料理でお茶をにごすんですから」とか「ツアー客用のメニューは特別で、とにかく安いことだけが取り柄なのだ。味にけちはつけられない」と書いた作家たちもいる。ここで注目すべきは、パックスツアーの客は別メニューだということだ。正確には、パックスの客にはメニューも配らず、皿は投げ出すように卓上に並べるので白けた気分になる。

ところが、前掲の山村美紗の作品ではツアーで《海角皇宮》行ったはずの主人公が「食べるのが怖くなるような巨大なロブスターや、大皿の山盛りになったゆがいたエビ…」などが続々と出て、「おいしいわ。新鮮で。それに量も多いのね」といっている。つまり、この女性作家は自分の食べた料理がパックス客向けと同じものだと思いこんでいるのだ。

水上レストランの数はいつの間にか減少し、最後まで残った《珍宝海鮮舫》もコロナ禍のせいで経営難に陥り、2020年に営業停止、2022年6月にどこかへ曳航されて行く途中に西沙諸島の沖で沈没した。これも作家たちのネタの一つになりそうだ。



会員寄稿文

ルワンダでソーシャルビジネス『手の届く世界に違いを作る』

山 田 美 緒

KISEKI corporation ltd CEO
 一般社団法人コグウェイ代表理事
 池田市観光親善大使
 高知県観光特使
 関西学院大学社会福祉学部非常勤講師



私は東アフリカのルワンダという国で KISEKI corporation ltd を経営しています。アフリカとのお付き合いの始まりは大阪外国語大学でアフリカ地域文化学科を専攻したこと、大学3年生の時に自転車でケニアから南アフリカまで8か国5000kmを単独縦断したことです。2016年から家族5人でルワンダに移住しました。当初は高級日本食レストランとして職人歴25年の寿司職人とともに高級住宅街に店をオープンしました。しかし順風満帆とはいかず、ルワンダ人スタッフのマネージメント、盗み、遅刻、無断欠勤、嘘、裏切り…に手を焼いていました。



ある日シングルマザーのスタッフに「あなたみたいな真面目なお母さんと働けたらなあ」と愚痴をこぼしたところ…翌日50名を超えるお母さんたちが職を求めて店の前に集まっていました（雇うなんて言っていないのに！）話を聞くと全員が無職または日雇いの仕事を日々探し回っているとのこと。経験なし、学歴なし、技術なし、資格なし、英語ができないという全く戦力にならない人たち・・・誰が彼女たちを雇うのでしょうか。ただ、彼女たちの必死の様子を見て同じ母として放っておくことはできませんでした。

移住当初から店のごみ箱を漁り、学校に行かずにふらふらしている私の息子たちと同じ年ごろの少年たちを何とかしたいと思っていました。そのためには家族のことに責任を持っているお母さんに仕事、収入がないといけない（レストランでの経験から男は頼りにならないとわかっていたので）。でも働くところがないのです。ないのならば私が作ろうと決めました。

そこで2018年“地域のお母さんが笑顔で暮らせる社会を創る”ソーシャルビジネスとして方向転換をしました。何もできないお母さんたちを雇用しプロフェッショナルに育てるために様々な工夫を凝らし、より多くのお母さんに雇用を生み出すために実力が付いたら「卒業」をさせました。多く

のお母さんがキセキブランドを背負い、一流ホテルやレストラン、国連や外務省、JICAなどの職員のお手伝いさんとしてキャリアを積んでいます。また、廃墟だったコミュニティーベースの幼稚園を修理し運営・管理、学費の設定と奨学金の給付などのマネジメントを行い、地域の貧困家庭の3～6歳の子ども100名が通える幼稚園として復活させました。

お母さんや幼稚園の子どもたちとのてんやわんやの経験は非常に学びが多く、あまりに面白いので私が独り占めするのはもったいない。お金を払ってでもこの経験をしたい人はいるのではないかとと思いつき、「1週間500ドル滞在費・食費込みのボランティア・インターンプログラム」として売り出したところ初年度から100名以上が参加する大ヒット。レストランの売上を凌ぎ大きく成長していきました。

そんな中コロナ発生、全予約がキャンセルとなり売上げの9割を失いましたが、「お母さんと子どもたちを二度と路上に戻さない」と息子たち3人とルワンダに残りビジネスを続ける決意をし、プログラムを現場からオンラインに移行しました。外出自粛で困っている日本のお母さんをター

ゲットに1カ月3000円で使い放題のルワンダのお母さんたちによるオンラインベビーシッターサービスを開始したところ、注目を浴びて会員数は100名近くになりました。現在オンライン事業は会員制のサービスとして定着し、ベーシックインカム・広告として、現地での活動を支える柱となっています。

さらに地域の需要に向き合い、子ども食堂・託児所・ICT教室・妊産婦のケアセンターを立ち上げさらに地域への支援の幅を広げることができました。今年はようやく日本からボランティア・インターンが戻ってきていてにぎわいを取り戻しています。様々な分野で私やルワンダ人スタッフの手厚いサポートのもと、自由度の高い活動ができるプログラムは大学の特別講義や授業、留学プログラムとしても採用されています。

“世界”は変えられます、貧困も飢餓もなくせます。どこが自分の“世界”かを決めること、そこでの課題に徹底的に向き合い間違えても失敗しても裏切られても諦めることなく変わるまで取り組みれば必ず変わります。これからも手の届く“世界”に違いを作っていきます。応援よろしくお祈りします。



会員寄稿文

山田美緒さんの紹介

矢 嶋 正 孝

今回の会報に、アフリカのルワンダで活躍されている日本人、山田美緒さんの寄稿文が掲載されましたが、私（矢嶋）が山田美緒さんに投稿をお願いした経緯をご説明します。美緒さんは、ニチメン大阪社友会会員山崎（西條）幸子さん（昭和49年入社、人事部、通称さっちゃん）の長女で、寄稿文にも紹介されていますが、大阪外国語大学時代にはアフリカのスワヒリ語を勉強され、日本人女性では初のケニヤから南アフリカまで、計8ヶ国5000キロを単独自転車で走破されました。そのことを執筆された日記『マンゴーと丸坊主』（幻冬舎）

によれば、女性の自転車ツアーは危険なため、丸坊主にして胸を布で巻き男装で走行されたとの事です。

私がニチメン勤務時代、メーカーの出張者2名に同行しアフリカに出張中、カメルーンの商業都市ドアラの街中を真っ昼間に歩行中に車で突っ込んできた10名の強盗に襲われた経験あり、よくまあ、そんな地域に日本人女性が一人で、現地の人達と対話しながら自転車で5000キロも走破されたとは、驚異的な体験です。

その頃より美緒さん関連のトピックスには注目しており、その他アジアや中南米諸国25ヶ国も自転車走破された『世界を駆け巡る女子サイクリスト』として、またボランティア活動家として新聞、雑誌等メディアに取り上げられ、タモリの昼間のTV番組で紹介された事もありました。その美緒さんが、海外青年協力隊で活動されていた山田耕平氏と2009年に結婚され、2016年からご家族5人（ご夫婦、お子さん3人）でルワンダに移住、現地では『KISEKI』という日本食レストランを経営、その様子を日曜の朝10時半放送の人気TV番組『グッと！地球便』（読売TV）で紹介されました（放映は2019年4月21日）。そのテレビ画面を写真に撮り、以下3枚に纏めた写真集をこの会報でご紹介します。

① 総合編

「グッさん」こと俳優の山口智充さんが、美緒さんの実家であるさっちゃんのご自宅を訪問、さっちゃんご夫婦へインタビュー。続いて、美緒さんがルワンダの日本食店経営の苦労話とボランティア活動を紹介。



② 21歳アフリカー人旅

旅日記『マンゴーと丸坊主』では、美緒さんが現地の様子を自筆のイラストで紹介

されましたが、TV番組では各地で撮られた写真が登場。頭を丸坊主にして男装された様ですが、可愛い女の子であることバレバレ。



③ ご家族編

ご主人の山田耕平氏は「類は友を呼ぶ」通りのボランティア活動家で実業家でもあ

り、3人のお子さんも日本ではありえないハプニングを経験されながら、生き生きと、大変楽しそうなご一家の生活ぶりを紹介。



美緒さんの凄いところは、ルワンダでオープンした高級日本食レストランの初期目標が未達となれば、現地のシングルマザーを育てるソーシャルビジネスへ主軸を転換、さらに旅行会社とタイアップして日本人への研修体験ツアーを「事業、教育、ボランティアの3本建て」で企画、コロナ禍が到来すればオンライン化したプログラムを開発しビジネスも福祉活動も継続。そして、目指すところは、いま世界で一番注

目されている「SDGs」の一端であり、更に、これらの体験をテーマに大阪大学、関西学院大学等々大学向けオンライン特別講義を実施。このトラブルをプラスに変えるエネルギー、多彩な発想とその実現 (Hassojit= 双日)、まさしく「総合商社のDNAを引継がれたスーパーレディ」であり、これからも美緒さんの益々のご活躍と「次はどんなサプライズを?・・・」期待を持って注目して行きます。

会員寄稿文

北京の紫禁城

中 田 龍 彦

現在の北京市の人口は2,188万6,000人(2021年12月31日時点、出所：北京市統計局)であり、中国では上海に次ぐ第二の都市。世界有数のメガシティである。北京は古くは大都・燕京・北平とも呼ばれた。北京の面積(16,411km²)は東京都の7.5倍、日本の四国より若干小さい。北京は華北平原の西北端に位置し、東部は山地、西部は太行山脈、北部は燕山山脈の一部である軍都山に接し、中心部以外は山に囲まれ、全市域の約62%を山地が占めている。北京の最高峰は万里の長城が延々と続いている北部山脈にある東霊山(海拔2,303m)である。北京市街地はこうした山岳地域に囲まれた盆地の中にあり、その平均海拔は20~60mである。海河(注1)流域に属し、永定河や潮白河などが流れるが、これらの河川には普段水が流れておらず水不足が深刻になっている。北京という地名は明代に入ってからのことである。燕王に封じられ北京を拠点とした朱棣(後の永楽帝)は、1402年に建文帝に対し軍事攻撃で政権を奪取、皇帝に即位した後、北京遷都を実行し地名を北京に改めた。

紫禁城：

北京市の真ん中に位置しているのが紫禁城で、故宫博物院(一般的には“故宮”)と呼ばれている。紫禁城は「北京と瀋陽の明・清王朝皇宮」の一つとしてユネスコの世界遺産(文化遺産)となっており、世界最大の木造建築群が建ち並んでいる。紫禁城の正面入り口が“天安門”であり、毎日多くの観光客が訪れている。紫禁城の名は、天帝(創造主)が住んでいる星とされる北極星を紫微星、北極星の周辺を回る星座の辺

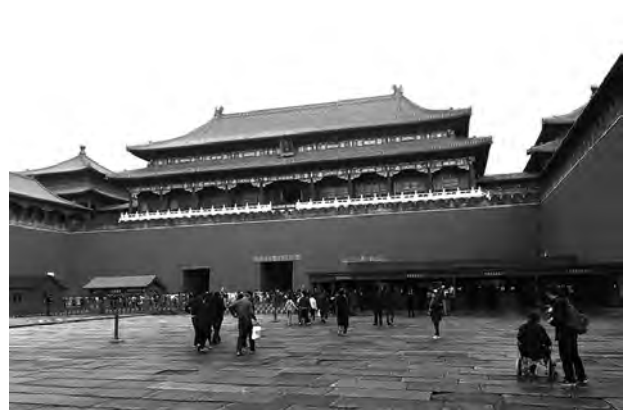
りを紫微垣と呼んだのに由来する「紫宮」、及び「天帝の命を受けて世界秩序の維持に責任を持つ皇帝(天子)」の住居たる「禁城(庶民などが自由に入るのを禁止された城)」の二語を合わせたものである。紫禁城は世界の中心を地上に具現した領域であり、天帝に代って地上を治める皇帝の住む宮殿として建設された。そのため「天子は南面す」の言葉通り、北に皇帝の宮殿が置かれている。

紫禁城は元がつくったものを明の成祖永楽帝が1406年から改築し、1421年南京から北京へ都を遷してから、清朝滅亡まで宮殿として使われた。紫禁城の広さは、南北の長さ961m、東西の幅753m、面積は約725,000m²であり、東京ドーム(47,000m²)が15個入る広さである。建築面積は15万m²、8,000以上の部屋がある。周囲は幅52mの護城河(堀)が囲む。城壁の高さ12m、底厚10m、頂厚は6mから7m。6つの門があり、南に天安門、更に北に向かうと端門と午門、東に東華門、西に西華門、北に玄武門(神武門)である。

清朝には太祖愛新覺羅努爾哈赤(アイシンギョロ・ヌルハチ)からラストエンペラーとして称される愛新覺羅溥儀(アイシンギョロ・フギ)までの12代の皇帝が即位をしている。1625年ヌルハチは遼寧省瀋陽に清を開き、第3代皇帝であった順治帝が1644年に北京に遷都した都である。清朝は順治帝に続く、康熙帝・雍正帝・乾隆帝の3代に最盛期を迎えた。



北京紫禁城の天安門 出所：筆者撮影



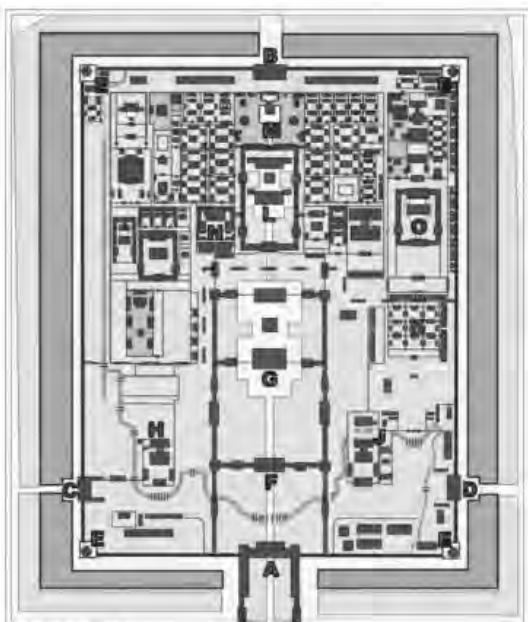
紫禁城午門 出所：筆者撮影



紫禁城太和殿 出所：筆者撮影



紫禁城から景山公園(楕円部分)を望む 出所：筆者撮影

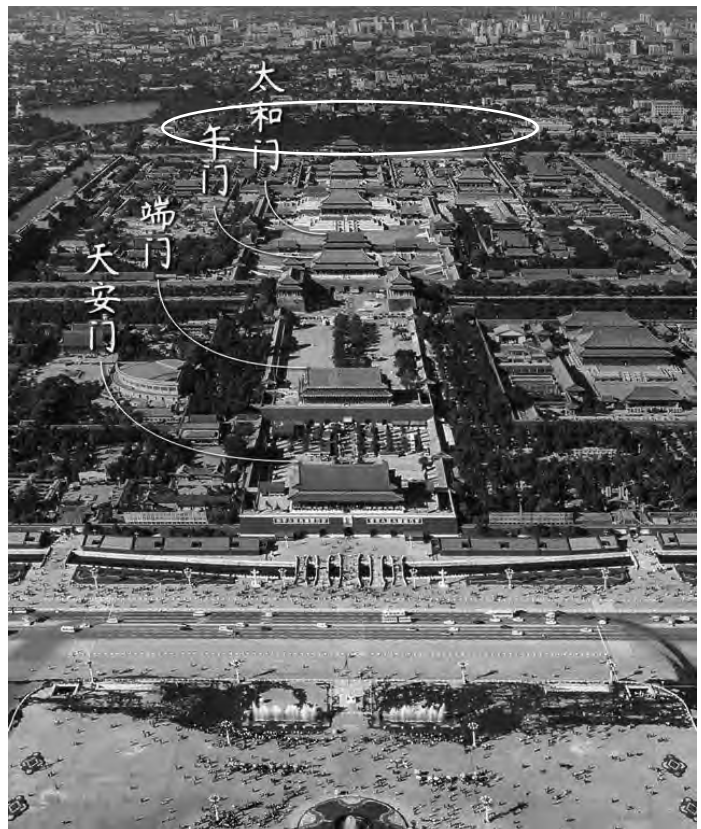


紫禁城見取り図

--- 内廷(北側)と外朝(南側)の大きな区分境界

- | | |
|--------|-------------|
| A. 午門 | H. 武英殿 |
| B. 神武門 | J. 文華殿 |
| C. 西華門 | K. 南三所 |
| D. 東華門 | L. 後三宮(乾清宮) |
| E. 角樓 | M. 御花園 |
| F. 太和門 | N. 養心殿 |
| G. 太和殿 | O. 皇極殿 |

紫禁城平面図 出所：ウィキペディア



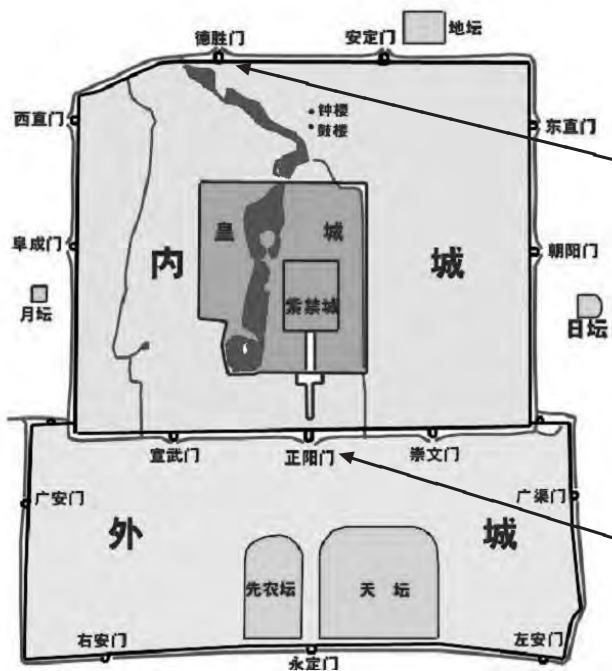
紫禁城全景 (景山公園=楕円部分)

出所：百度 什么可以代表北京

台北にも故宮がある。有名な話だが、中国国民党が中国共産党に敗れ、1948年の秋に中華民国政府は故宮博物院から2,972箱に及ぶ所蔵品を精選して台北へと運んだ。これによって誕生したのが台北市の国立故宮博物院であり、現在故宮博物院の所蔵品は北京と台北の2カ所に別れて展示されている。また所蔵品の一部は、国共内戦後の中華人民共和国建国後の混乱のため北京に戻すことができず、現在も南京博物院の管轄の南京市に保管されている。従い、北京紫禁城は土地と建物が残り、その中に存在していた宝物は大型で運ぶことが困難なものを除き、めぼしい物は台北故宮に移されている。台北故宮博物院は本家本元の北京故宮に比べれば非常に小さな建物である。しかし、常時展示しているのは、その一部にしかすぎず、収蔵品は60万8,985件にも及ぶことから世界四大博物館のひとつに数えられている。博物院では3カ月に1回の割合で展示品の入れ替えがあるが、膨大な所蔵量のために、全ての所蔵品を見るためには8年余もかかると言われている。

北京の城壁：

中国の城壁といえば異民族を防いだ万里の長城や、都城の守りである西安や平遙(注2)などの巨大な城壁が有名である。不思議なことに幾度も首都となった北京にはそのような城壁は見当たらない。実は北京も20世紀半ばまでは、敵の侵入を防ぐため都の四方は立派な城壁で囲われていた。明の永楽帝が現在の北京を都と定めたのが1403年。元王朝が整備した都を引き継ぎ城壁の基礎を築いた。明と清を通じて北京は発展し、都の守りとしての城壁も増改築が進められた。北京は嚴重に内城と外城二つの部分に分かれていた。外城は、内城の南側に出っ張るような形の部分で、言うなれば「下町」のような場所であった。内城は紫禁城があり、官僚なども住んでいただけあって、格式ばった雰囲気があるが、外城は商店も多く、道も込み入っていて、なんとなく繁雑とした感じがする。下記の“北京の城門と紫禁城”の図を参照願いたい。北京の地下鉄環状線は、ちょうど東京の山手線のように、北京旧・内城をぐるりと回り北京市



北京の城門と紫禁城
出所：ウィキペディア



德勝門 出所：百度



前門（正陽門） 出所：百度

民の便利な足となっている。この環状線には18の駅があるが、そのうちの11の駅の名の最後の文字は「門」が終わっている。何故そうになっているかと言えば、旧北京の内城を囲む城壁を取り壊して、その地上部分に北京市の主要幹線道路である第2環状線道路を建設した。その後、第2環状線道路の下に地下鉄の環状線を開通させたことから、昔の城壁の門の名前をそのまま現在も地下鉄の駅の名前として残しているからである。内城は、俗に言う北京城の部分で、9つの門があった。この9つの門のうち、現存するのは正陽門（前門）という故宮の真南にある門と、徳勝門という北西の門のみである。在りし日の北京の城壁を見たければ、地下鉄環状線の前門駅で降りれば前門（正陽門の俗称）を、積水潭駅で降りれば徳勝門を、建国門駅で降りれば東便門の角楼を目にすることができる。このほか、復興門駅近くでも、明代の城壁の跡を見ることができる。

景山公園：

紫禁城の北側の玄武門（神武門）を出るとその対面にあるのが景山公園で、明・清代の皇帝の庭園となった人口の山、面積は23万㎡、高さは44.6m（海拔88.7m）。元のフビライが13世紀の半ばにこの地を皇帝の御苑にしたところから始まる。明代になり永楽帝が城壁を改修する際、紫禁城に殺気が入ることを防ぐために、紫禁城の真北に作られたと言われている。これは背山面水という風水の考え方を実現したもので、“北から入ってくる邪気から城を守る”という意味でここに小高い山を造った。元の宮殿であった延春閣の跡地に、堀を掘った時の残土で五つの峰を形成する形に作られた。堀や隣にある南海を掘り起こした際の土を使った43mの山は、清代には京城の中で最も高い地点だった。中華民国時代に景山は公園化された。景山公園は、山頂にある「万春亭」を中心とし、山麓には左右対称に

「周賞亭」、「観妙亭」など合計5つの亭が建っており、山の南に「奇望楼」、北に「寿皇殿」が配置されている。万春亭からは南に広がる北京の城下を一望でき、特に夕刻には眼下の紫禁城の薨が夕日で黄金色に輝き絶景を楽しめる。また東南の山麓には明の最後の皇帝であった崇禎帝が李自成軍に攻められたとき首吊り自殺をした槐の木がある。また北側には清代の建物も残っている。景山公園は、清代の皇室の禁苑であったが、1928年に民衆に開放され、土日や夕刻には地元の高齢者が多く集まり、民謡や歌謡曲を合唱することで知られている。地元の人のために入場定期券が発行されている。2001年に中華人民共和国の全国重点文物保护单位に指定されている。



景山公園入口から山頂の万寿亭を望む
出所：ウィキペディア



景山公園山頂南側から見る紫禁城
出所：筆者撮影

北京の味：

私のお気に入りの北京の味は北京ダック、羊肉のシャブシャブ、キノコ鍋の3つである。

烤鴨：

まず北京の食といえば、何と言っても先ず北京ダックだ。中国語では「烤鴨」(カオヤ kǎo yā) 直訳すると「焼き鴨」といった語。独特の風味と、リーズナブルな値段は、北京ならではだ。下処理したダックを湯通し、表面の皮をピンと張った状態にして餡を塗り、腹部いっぱい空気を含めて、炉に入れて焼く。北京ダックを焼く炉には大別して二派あり、一つはカリッと仕上がる「掛爐(炉)」(ケイロ guà lú) で、もう一つはしっとり仕上がる「焖爐」(モンロ mèn lú) がある。炉(窯)の中でパリパリに焼いたアヒルの皮を削ぎ切りにし、小麦粉を焼いて作った「薄餅」(バオピン báopīng) または「荷葉餅」(ハイエピン héyèbǐng) と呼ばれる皮に、ネギ、キュウリや甜麵醬と共に包んで食べる料理である。皮だけを薄く削ぐ店と、ある程度肉も付けて切る店がある。

北京の老舗のうち「全聚德」(ゼンシュトク Quán jù dé) は前者、もう一つの老舗「便宜坊」(ベンギボウ Biàn yí fāng) は後者。それぞれ1855年と1864年に開業している。北京が発祥地とされているが、15世



全聚德の烤鴨(カオヤ)

出所：去哪儿旅行

紀に明の永楽帝がアヒル料理の盛んな南京から遷都した際に原型となる「叉焼鴨」が伝えられ、北京で宮廷料理にまで発達したといわれる。このため、南京の別称である「金陵」を冠した「金陵烤鴨」とも呼ばれた。

涮羊肉：

羊のシャブシャブ(中国語：涮羊肉、shuàn yáng ròu)の有名店は東来順である。中国が改革開放をした1980年代には、王府井の東風市場に本店があったが、現在は北京に直営店9店舗、フランチャイズを含め中国全土に150店強の店舗を展開している。鍋中央の煙突の中に石炭・練炭類がくべられ、ナツメヤクコの実といった薬味類が予め入ったスープが煮立ったところに薄くスライスされた羊の肉をさっと通して、手元のゴマだれにつけて食す、モンゴル起源とされる食べ方。またホウレンソウ・白菜等の野菜、フェンス(粉絲)と呼ばれる緑豆から作られたビーファン、高野豆腐(干豆腐)や生豆腐を入れて食べる。



東来順涮羊肉 出所：筆者撮影

キノコ鍋：

中華料理は油で炒めた料理が全てと思っている人が殆どだろう。しかし、中国で実際に住んでみると冬場は結構鍋料理を食する機会が多い。中国では鍋料理のことを“火鍋”と呼んでいる。色々な鍋料理がある

が、その中で私が一番美味しいと思うのは、キノコ鍋である。北京でキノコ鍋で有名なのは小背篓 (xiǎo bèi lǒu、小さな背負い籠) である。小背篓の本店は遼寧省瀋陽市にあるが、設立は1998年と新しい料理店である。中国東北部にも支店や加盟店がある。北京にも支店があり、機会があるごとに小背篓を訪れた。小背篓の売りは、数十種にも及ぶキノコである。このキノコを烏骨鶏 (ウッコッケイ、注3) の鶏ガラスープの中でキノコを煮て食べる。店のサービス員は牛肉・豚肉・羊肉等もオーダーして食べるように勧めるが、絶対にこれらと一緒に食べてはいけない。せいぜいイカやエビのつみれ団子と野菜を中心に食べ、最後に鍋の中に残っている鶏ガラ等の固形物を取り出す。そこに白米を入れておじやにする。白米がお粥になったら火を止めて、溶き卵を入れて蓋をして半生の卵となるよう少し蒸す。肉を我慢しただけのことはある、これを頂くとキノコと野菜のエッセンスが効いた何とも言えないおじやを食べることが出来る。烏骨鶏のスープは通常のものより辛いものの2種類があるが、キノコの味を楽しむには前者をチョイスすることをお奨めする。



小背篓のキノコ鍋
出所：去哪儿旅行

注1：海河 (かいが 拼音: Hǎi Hé) は、中華人民共和国を流れる大きな河川のひとつ。華北でも最大級の川で、北京市と天津市の全域、河北省の大部分、河南省・山東省・山西省・内モンゴル自治区のそれぞれ一部を流域に含み、渤海へと流入する。

注2：平遥 (へいよう、拼音: píng yáo) は、平遥古城 (へいようこじょう) と呼ばれている中国山西省晋中市平遥県の古い城郭都市。省都の太原から南へ100キロの地点にある。1997年、ユネスコの世界遺産 (文化遺産) に登録。平遥は明代から清代末期まで晋商とよばれる山西商人の拠点であり、特に清代末期は為替業務で栄えた中国の金融中心地であったが、清末から民国期の動乱に際して業務継続が困難となり、20世紀後半には貧困地域に転落した。しかしながら、県財政に余裕がないために都市の再開発が行われず、結果として平遥古城には14世紀の明代始めに造営された町がそのまま残ることとなった。

注3：烏骨鶏 (うこっけい、拼音: wū gǔ jī) は、鶏の一品種で烏骨 (黒い骨) という名が示す通り、皮膚、内臓、骨に到るまで黒色である。羽毛は白と黒がある。優れた組成を持ちまた美味であるため、現在でも一般的な鶏肉と比較して高価格で取引されている。また、卵も同様の理由により非常に人気が高く、産卵数も週に1個程度と少ないことから、一般的な鶏卵と比較して非常に高価である。

会員寄稿文

木材求めて旧満州へ

奥村 睦夫

1983年10月22日夕、北京首都国際空港に着いた。2度目の中国、初めての北京で、空港から市街地までの道中及び市街地は街灯が少ないので薄暗く、何となく不安を感じたのを覚えている。

今回は、大阪の大手木材問屋S社の要請による東北地方（旧満州）産の広葉樹原木の買付出張。当地産木材（業界語：“雑木＝ぞうき”）を戦前にS社が取扱っていた事、同社が戦後に北海道産雑木を扱うも、国内住宅需要増に応じる事が難しくなり、ニチメン木材部に当地産雑木の輸入取り扱い依頼あり、大阪木材部勤務時にS社と親しかった筆者に出張命令が下りました。

中国部に相談結果、早々に住山忠雄さんからハルピン貿易(株)小島サタ社長の紹介を受けました。小島社長と種々打合せを重ね、S社釧路佐藤支店長さん共々、訪中することになりました。

北京空港（旧空港）では先乗りしておられた小島サタさんの出迎えを受け、天安門、中南海近くの全館が薄暗い「民族飯店」に宿泊。不安と期待が入り交じった第一夜だった。

当時、外国人の地方移動は当局の許可が必要で三日後に取得し、北京駅に駆け込み、夜行列車軟座四人部屋で出発、ほぼ一昼夜かかって黒竜江省ハル濱（ハルピン）に到着。ハル濱国際飯店に投宿、林業局の面々との打合せを済ませ、翌々日牡丹江・虎林經由終着駅である「東方紅鎮」駅に到着。駅前の林業局招待所に入り、荷を解く。ここは、中ソ国境ウスリー江まで10数^{キロ}、中国の最東端の林業の街である。宿舎内のテレビではソ連のロック番組を放映していた。



旧洪河農場：日綿と中国農墾部との合作農場、佳木斯から約300^{キロ}。

ハル濱：ロシア風の大都会、ハル濱駅で伊藤博文が遭難

東京城：旧渤海国の首都でもあった町

延吉近辺：朝鮮語族の多い地域

長白山（主峰が白頭山）：松花江、鴨緑江の水源。山麓に目指す木材を多産。

臨江：鴨緑江の左岸は北朝鮮、巡回兵士が肉眼で見た。

小島サタさん：終戦後に八路軍の通訳をされていた由で、八路軍出身者が多い林業局と親しく、流暢な満州語を話され、顔パス的存在で外貨を求める林業局の要請とが合致。品川区北品川にハルピン貿易を設立、木材、大豆粕等の取扱いを始められた。



小島社長



S社佐藤さんと筆者、牡丹江駅前にて

取扱樹種：タモ材（中国名：水曲柳英名：ASH）、樺材（中国名：柞木 英名：OAK）など

*タモは漢字で「柞」 ➡ 今回の本命である。主な用途：建築内装材（框など）、スキー板農具、家具、銃台など特に、青タモ、谷地（やち）タモは野球のバットに多用される。

*樺（なら）材は、家具、建築内装材、床材（フローリング）、洋酒樽など

10月下旬で検品現場は氷点下、昼食後に白酒を一口グイ呑み、温まってから午後の検品作業。



検品前：東方紅林業処の面々、センターが筆者



佐藤さんと筆者が両木口に位置し、木口面の欠点等声掛け合いながら一本一本選木する。

検品基準：材長4mと6mの2種、直径45cm以上、木口面無欠点（割れ・目回り等無し）、年輪（夏目、冬目）の整ったもの、円くて通直な形状であるもので、製材後の板面仕上がりを考慮しながら選木する。合格材には林業局の格付員（GRADER）の了解を得て、丸太の木口面に朱肉でS社の刻印を4～5ヶ所ほど打ち込む。朱肉で刻印を打込むのは”ごまかし防止”である。

成果：約400㎡（約1,440石）成約、翌4月に大連港発北海道釧路港着、S社からは「いい商売をさせてもらった」と好評で、“次回はいつ?”との催促が続いた。大連港船積みの際には、大連店の松尾邦晴支店長にたいへんお世話になりました。本紙面を借りて、厚く御礼申し上げます。

因みに、S社から、この中国産原木輸入が日本では戦後初めてだったとの報告を受けている。

ここで、JAS規格（日本農林規格）での材積計算の話をししましょう。

材長（計算上）が6m（実長6.2m）で、細い方の木口の直径を二乗し材長を乗じる。

*直径50センチ・長さ6m ➡ $0.5 \times 0.5 \times 6 = 1.5$ リューベ（立方米）

業界では取引単位に“石：こく”を用い、請求書などの書類上では“㎡：リューベ”を使う。

*石とは、1尺x1尺x10尺（1丈）で、 $30.3\text{寸} \times 30.3\text{寸} \times 3.03\text{m} = 0.278\text{m}^3$

* $1\text{m}^3 \div 0.278\text{m}^3 = 3.6$ 石/㎡ ➡ 穀物計量での「石（こく）」も同じ計算です。

立木（リュウボク：林地に生えてる樹木）の伐採：ここでは落葉樹のケースで説明します。

伐採時期：落葉し水分を吸上げず、成長がストップする時期、即ち、秋彼岸～春彼岸の間が最適。林地に雪が降り、含水率が減じた丸太を人力、牛馬力、重機で凍結した林地を滑らせ、山土場（最奥の原木集散地）へ運び、そこからトラックなどで鉄道駅近くの集積場へ搬出し、検品、造材（トリミング）、格付、検量、完了後、買い手に引取られ、乾燥して製材される。

注、満州での積雪量は北海道に比べ、極めて少ないので運材は北海道比かなり捗ります。

以降、小島社長の黒竜江省ルートに加え、北京林業部傘下の「国際林業合作公司」、吉林省林業局、遼寧省林業局等のルートを開発、1988年末迄この商いは続き、訪中も10回を数えた。

この間の主な訪問先は、黒竜江省：哈爾濱、東方紅、興隆鎮、佳木斯、樺南、方正、東京城等吉林省：長春、吉林、通化、敦化（旧渤海国の最初の首都）、大蒲柴河、黄泥河、松江、白河、露水河、臨江（鴨緑江沿いの街、対岸は北朝鮮）などで概ね「長白山」の西側山麓の街である。

顧客も大阪S社（佐藤さん、木花さん、辻さん、松本さん）に加え、北海道旭川のA社Oさん等
➡いずれの方もこの種雑木商いのプロで、目利きの人達ばかりで、大いに助かりました。

取引形態も各林業局相手の直取引から、各省林業局が大連市近くの大連湾林場で主催する入札形式（日本の商社、木材問屋、等が応札）に切替わり、奥地への検品出張はほぼ無くなりました。

➡この種取り引きも、1989年6月の天安門事件の余波で商いそのものは延期状態。



一等材の揃積み（はえつみ）

一等材（径65cm）の木目

検品中の筆者：於、大連湾貯木場

注：丸太を横に積み上げ山のような「揃＝はえ」と言う。

10回の当地出張の際には、松尾邦晴さん、小出誠一さん、緒方政治さん、籠波俊之さん、修淑琴さん、西村光雄さん、佐藤英二さんにお世話になりました。有難うございました。

***業務の合間：

小島社長持参の炊飯器とおむすび：その日は休息日、哈爾濱国際飯店の自室で昼食の心配をしていたところ、“ごはん炊けたよ！食べにおいで！”と社長から電話。佐藤さんと社長の部屋へ出向いたところ、テーブルの上に「海苔巻きおにぎり」と沢庵と鯖缶が三人前。おにぎりはまだ温かい！炊飯器にはまだ炊き立てのご飯がある。お代わりOKと言う、米も日本から持参した「コシヒカリ」だ。

“涙が出るほど美味しかった！”中国料理が続いていたので格別だ。お代わりもいただいた。どうやら、炊飯器、日本米、缶詰、漬物などは国際飯店に預かってもらっていたようだ。検品など地方移動後に哈爾濱へ戻る楽しみが増えました。

残留日本人？：84年6月樺南市街地を散歩中、道端の縁石に腰掛け、ジッ〜とこちらを見詰める爺さん（60代半ば？）と10数秒ほどだが目が合った。通訳と話す筆者の声高の大阪弁が耳に入ったのか、何かを話したいような、迷ってるような、でもジッ〜とこちらを見てる。

粗末な服装で、髪は薄く残った白髪が乱れ、長年の苦勞がにじみ出てるような顔立ちがどう

も地元の人達とは多少違うような印象を受けた。そのまま行き過ぎたが、いまでも、あの何かを訴えたいような目線をハッキリと覚えております。話は飛びますが、1972年インドネシアのハルマヘラ島で同じような眼差しの老人に見詰められたことを思い出しました。

白酒（パイチュー）はキツイ：戦後東方紅に来た日本人は多分我々が始めてだろう。林業局の人達のほか、多くの地元民が、我ら日本人を見に集まって来た。一方、招待所の担当官達との夕食が始まる。彼らは官費で呑み食いできるし、お酒も高級だし、円卓には食べ切れないほどの地元料理が出てくる。私達は所謂「ダシ」でまるで彼らの宴会みたいだ。そして乾杯が続く、なぜか筆者に集中攻撃だ。小島社長曰く、「無理して呑まない、たくさん食べて胃を満たしてから呑むように、断ってもいいんだよ」などとアドバイス。でも、酒好きの筆者はついつい、お相手する事に……。次の出張からは、日本からベビーチーズを持参する事にし、事前に3～4個ほど食べてからいざ戦場（宴会）へ臨むことにしました。

凍てついた道路はまるで高速道路：冬の満州は降雪はあるが、積雪は殆ど無い。零下数十度の道路は凍結するが我らの乗るミニバスは通常タイヤでチェーン無しで高速で疾走する。

でも滑らない。行き交う車も少なく、空気中の水分は凍結降下してる。彼らは平気で突っ走る。ここまでの低温ともなればタイヤとの摩擦で路面が溶け出す事もないようだ。

外貨兌換券(1980年から使用開始、1995年に廃止)：

当時、宿泊費、交通費、私的買い物などの支払いには、外国人のみが使える「外貨兌換券」を使った。交換レートは1983年当時で約110円/元・・・「世界経済のネタ帳」調べ友誼商店での買い物の際、「おつり」を女服務員から投げ返され、驚いた記憶が残っている。

➔1980～90年代に中国へ駐在、出張された方々にはご記憶のことと想います。



- ・黒竜江省の僻地である林業局では、この兌換券の存在を知らない人達もいました。
- ・人民元紙幣はほぼ全てがしわくちゃで、汗と涙が染み着いたのだろう「臭いお札」だったとの記憶が残ってる。
- ・兌換券と臭い人民元の交換率は闇で、兌換券1元 = 1.5～2.0人民元だった由。

木材の乾燥：針葉樹（松、杉、檜など）、広葉樹（柎、タモ、ケヤキ等）を問わず、木材固有の欠点（収縮、割れ、反り、ツイストなど）をミニマイズさせ、最終製品（家具、床材など）が“長期間狂わない”ように乾燥が不可欠で、厳重なる含水率管理が行われる。

特に広葉樹は英文で「HARDWOOD」と表すように、針葉樹「SOFTWOOD」に比べ、極めて強く、含水率管理が難しい。樹種にもよるが、製材後に天然乾燥（AIRDRY）で1年～2年、徐々に含水率を下げ、最終的には近年流行りの人工乾燥（KILN DRY）で最終微調整する。

従い、長期間資金が寝る事になり、コスト負担が生じる。高級家具などが高価なのは、素材価格、運搬費のほかに、乾燥を含めた加工コストが大きな割合を占めているためなのです。

最初から人工乾燥してしまえばコストダウンになるのだが、急激な含水率減少は木材細胞に悪影響を与え、様々な狂いが生じる事が多く、伝統的な“天乾+人乾”方式を採用している。まさに、“匠：たくみ”の世界と言えます。 おわり

会員寄稿文

日本綿花創立130周年に想う

山 邑 陽 一

コロナ下で長い間開かれなかったニチメン大阪社友会の懇親会が9月14日にホテル阪神で開催され、コロナ禍が治まりきれない状態状況下で出席者がやや少ないなか、久しぶりに出会った会員たちが旧交を温めあった。前月の終戦記念日特集のNHKテレビ番組で大きく採りあげられた、ビルマ戦線への日綿実業ラングーン店の貢献も当然話題となり、この日の双日藤本社長のスピーチのテーマの一つにもなった。

双日が発行しその会で配布された発想術の小冊子に述べられているように、日本綿花は個人商店ではなく、最初から最も民主的な企業形態である株式会社として発足した。東洋のマンチェスターと呼ばれるに至る大阪で、紡績会社と資産家25名が発起人となり、1892年に設立された。近代日本建設のためには商工都市大阪の発展が不可欠と見た五代友厚や広岡あさの発想を実現した一例であり、広岡あさの夫・広岡政次郎も発起人の一人となった。

日本綿花には大阪商人として、東京や新興都市神戸の企業とは違った独特の風格と暖かさがあつた。米の買い占めから庶民の恨みを買って焼き討ちに会い倒産した鈴木商店と、近世に世界に先駆けて、手形取引による米の実需先物取引相場を発想し実行した大阪の商人とでは、商業に対する矜持が全く違う。五代友厚の大阪での業績は、幕末に大坂商人から莫大な借金をした薩摩藩の大阪への恩返しだと、五代自身が語っている。

時下って、ビルマ戦線への参加という軍の命令は、平和な綿花などの取引に従事していたビルマ日綿にしてみれば、大変なことであったと思われる。だが日綿の先輩たちは実にすばらしい方法でこれを実行した。

当時ビルマ軍のアウンサン将軍は、インパール作戦に失敗した日本軍を見捨てて英国側につき、抗日戦線の先頭に立った。英国は弱体化した日本軍を駆逐するためにこれ以上戦う必要はないとして、アウンサンを援けなかった。

この状況下で日綿が採った行動は、ビルマ軍と戦ってビルマを大日本帝国の植民地として確立することではなく、ビルマが英国から独立し戦後民主主義国として歩むために必要なインフラを、ビルマに建設することであった。バルーチャン発電所建設などはこのためであつて、当時このプロジェクトの遂行を担当した日本工営は、日綿が商事会社であるにもかかわらず、この仕事のために熱心に働きみごとに完成させたことに、大いに驚いたという。

このようなビルマでの日綿の戦中・戦後の行為は、帝国末期の日本の植民地政策に従ったもので、これについては辛島理人『帝国日本のアジア研究—総力戦体制・経済リリズム・民主社会主義』明石書店・2015に詳しい。これを学ばせるために帝国日本は、アジア各国から南方特別留学生を招き、スカルノもその一人であつた。ABCD包囲網の原因となった日中戦争の愚行にもかかわらず、インドが東京戦争裁判で日本を無罪としたのは、この政策を理解したからであつた。戦後來日したヘレン・ミアーズは『アメリカの鏡・日本』という本を書いた。GHQがこれをすぐ発禁にしたけれど。

この政策に従って日本は誠実に戦後賠償を履行し、アジア各国に多額のODAを実行した。赤松要が提唱した雁行形態論が始動し、ASEANができ、東アジアの経済発展は「東アジアの奇跡」と呼ばれるに至った。総合商社10社（のち9社）がこの分野でも

トークも挟みながら会場は大変盛り上がり、また、演奏も同じ東京藝術大学のご学友で、其々が、鼓、箏、篠笛を奏でお仲間3名との合同演奏となり、民謡にとどまらず、歌謡曲、ポップス、演歌もと多くのジャンルの演奏を歌と共に披露されました。クライマックスの、凄まじい速さで棹の上を指が移動しての音階の変化と、力強い撥による演奏はそれは素晴らしく、スタンディング・オベーションでした。

三味線は、右手では強弱ある撥さばき、左手で音階を定める素早く繊細な指の動き、普通はこの両手だけの演奏ですが、駒田早代さんは、「足太鼓」という足での操作が必要となる太鼓も加えての演奏をされます。驚きましたのは、なんと、この足太鼓、中学生の時にご自身で発案、創作されたそうです。一人での演奏時に、もっと幅を持たせ華やかにしたいと考えられてのことだと話されていました。

この日に初めて鑑賞し、その演奏はもちろんですが、よく通るしかもとても力強い歌声とその歌唱力、そして、そのお話しぶりからの明るいお人柄に、一気に魅了されファンになりました。三味線自体への認識も新たにしました。その迫力ある音としなやかな音、か細いくらい細く、太く、高低、強弱など、奏者によって自在に変化のある音を奏でる楽器、津軽三味線は太棹で太鼓が大きいことから、三味線の中では一番ダイナミックな演奏が出来るとお聞きしました。是非また鑑賞に行きたいと願っていましたところ、その願いは早くもかなえられました。

9月中旬、秋の声を聴き始めた頃、京都の北、清流の流れる、くしょうざんリゾート渓涼床>でのディナーショー《秋の三味線川床SPECIALLIVE2022》開催のご案内を戴き行ってまいりました。そこには、やはり社友会の方も、岡崎会長ご夫妻はじめ、駒田さんにご懇意の藤田康弘さん、共に数名の方がご来場されていました。



豊敷き川床、緑の自然が美しくライトアップされた中、流れる清流の音以外は全く雑音の入らないお食事処で、祇園の舞妓さんの姿も見え、京の初秋の夜の雰囲気最高の演出が用意された中で、黒紋付の衣装に夜会巻の髪形で登場され京都の民謡と代表的な青森県の津軽民謡を中心に、しっかりと歌い上げられて素晴らしく素敵な演奏でした。前回の舞台での演奏は、日中とても迫力のある力強いものでエネルギーを感じ元気になりましたし、今回は夜の落ち着いた場所で細棹の三味線に替えての長唄も含め、しみじみとした弾き語り、穏やかな余韻と共に帰宅いたしました。駒田早代さんの演奏の新たな魅力に出会うことが出来たのです。



更に、早代さんのMC（司会進行、トーク）はとてもテンポよく、前述のように多岐にわたる話をされ、進行役も兼ねておられるので、ご自身でツッコミをなさったりとジョークも多くて、とても面白く、演奏が遅れても？トークをもう少し聞いていたいと思うくらい、と言えは叱られそうですが・・・お話も楽しい方なのです。



今回の京都でのコンサートも、最後の演奏曲終了と共に、岡崎会長が花束を贈呈されたのですが、受け取られながら「わー！綺麗な花束、嬉しいです、どうもありがとうございます！！

（ここで客席に顔を向け）

他にはございませんか？ウソです嘘です冗談です！！（笑）」と、ユーモアたっぷりの明るい声と満面の笑顔でおっしゃられ、皆さん大笑いでした。実力も然る事ながら、このような茶目っ気もある、大変チャーミングで美しい三味線奏者、駒田早代さんのことを是非皆様にお伝えしたくなりました。

私にとりましては、社友会入会にて故会員の野上繁さんの紹介にて、山本さんとお知り合いになれたことで頂戴しましたご縁ですので、それを発信して出来るだけこのご縁を皆様に広げることが出来ましたらと考え、ご紹介することにいたしました。

若い頃、自分が子育て時代には忙しく時間が限られる生活の中で、残念乍ら和楽器に興味を持つこともなく過ごしてきました。今、孫達が何にでも興味を持ち、日々多くのことを吸収していつている姿を見て思う

ことは、このような素晴らしい芸術を鑑賞することは、必ず情緒豊かな感性の優れた人間に育つ助けになることと思ひ、ならば自分の楽しみだけで終わらず、幼子が鑑賞する機会を作ることは祖母の役割でもあると、機会を見つけて連れて出かけたたいと願っております。

ニチメン大阪社友会にて再演のお話もあるようではございますので、具体化しますと、その内、ご披露いただけるのではないかと期待しております。

現在、東京を拠点に、東京三重、京都にて教室もなさっています。今後の演奏会、教室などにつきまして、ご興味のおありになる方は、以下にHPなどを記載しておりますのでご参照いただければと思います。



三味線奏者駒田早代さん

三重県津市出身。10代で津軽三味線日本一を獲得。東京藝術大学を卒業し現在は全国各地で演奏活動をしながらか古典である民謡、オリジナル曲からカバー曲、Pops を民謡調にアレンジして弾き語りするなど、幅広い層から支持を集める。

HP→<https://sayo-komada.com/>

公式LINE→<https://lin/kkSlwWd>

会員寄稿文

ニチメンビルマ会回顧録「商社マン かく戦えり」

奥村 睦夫

22年8月15日(月)放映の「NHKスペシャル ビルマ絶望の戦場」の番組制作に先立ち、NHKさんから双日(株)広報部経由、ニチメン東京社友会に、取材協力の依頼がありました。注)10月16日NHKBS1にて「ビルマ絶望の戦場」完全版がロングバージョンで再放映された。

掲題“商社マンかく戦えり”への寄稿者(後述)の体験談を題材の一つにしたいので、ご本人、或いはご遺族を紹介してもらえないかとの要請でありました。

NHKによると、本回顧録は「国会図書館」で閲覧したが借出しは不可で、コピーも一部しかできず云々との説明がありましたので、まずは原本を探す事に注力し、ニチメン100年誌に本回顧録の概略があり、その中に「ビルマ赴任途次、米潜水艦により撃沈された大洋丸で遭難された三分一克己様」を発見、三分一克美様のお父上ではなかろうかと考え、お電話させていただいた結果、この回顧録をお持ちとの事で、拝借し、双日(株)広報部あて転送、全頁コピー(3部)をお願いしたところ、快く受けていただき、①双日(株)広報部、②NHK担当ディレクター、③筆者の手元、にて保管しております。

尚、③は会員様の閲覧用として社友会事務室に保管する予定です。

社友会会員各位には、寄稿者、或いは登場人物をご存じの方もおられるのではと考え、会報の紙面をお借りして、回顧録概要を紹介させていただくことに致しました。

手持ちの回顧録は昭和54年6月1日改版で、A5サイズ、全337頁、ビルマ戦線での日綿實業職員の体験談が写真と共に状況(戦況)に応じて、1章~10章に分類して紹介されております。

発行者は松岡啓一氏(当時のランゲン支店長) 編纂担当は山中滋也氏、白瀬正氏、田中康夫氏。

「回顧録」寄稿者(敬称略 順不同)：

| | | | | | |
|--------|-------|--------|-------|-------|-------|
| 松岡 啓一 | 石橋 鎮雄 | 秀島司馬三郎 | 板谷 樹吉 | 柴田 専吾 | 黒江 龍三 |
| 鈴木 太一 | 堀 齊太郎 | 税所 郡三 | 白井 等 | 林 正男 | 山中 滋也 |
| 阿多宏太郎 | 山下 林 | 新福 佑信 | 板倉 伊八 | 白瀬 正 | 新居 幸雄 |
| 高堰喜久太郎 | 田中 康夫 | 平田 鋭之 | 川野 洋三 | 大西 喜也 | 松本 希道 |
| 甲 重信 | 高見 永二 | 石川 幸造 | 吉岡 辰夫 | | |

注、各氏の寄稿文は、タイトルを○印で示し、一部の方につき要約(*印)を書き記しました。

序、戦時中、ビルマにおいて、物資の生産、集荷等に従事しておられた商社の諸兄が、戦勢急迫の際、突如軍務に就き、心身の一切を祖国に献げて悪戦苦闘されました勲業、分けても戦没烈士の御偉烈を偲び、至高の敬意を表させていただきます。

櫻井省三(元第二八軍々司令官陸軍中将)

前書、大戦中、日綿がビルマへ派遣した186名(現地除隊雇用者数名を含む)のうち、52名の有能の士が会社の為日本の為に戦死(病死2名を含む)されたこと遺憾の極みで、実に惜しみて余りあり、ご遺族のご心中を察すれば断腸の思いがある。—中略— 故にご遺族及び生還者の家族、子孫にありのままの状況を伝え、戦争が如何に悲惨なものであるか、平和が如何に尊いものであるかを知って貰いたい念願から生還者の有志が集い、執筆と醸金をして回顧録を作成した次第である。

松岡 啓一



第1章 日本綿花ビルマへのり出す

1918年（大正7年）、ランゲン出張所開設、綿花・米・雑穀を取り扱う。1920年支店に昇格、以降繰り綿工場、精米所、製油所なども経営。当時の日本綿花は大半が海外勤務、入社時に「海外に勤務することを厭いません」との誓約書を入れていた由。

- ビルマ綿の取り扱い ○初めて見るランゲン ○しいたげられた国民 ○日露戦争以降日本に敬意を懐く ○仏の教えに素直な国民 ○綿屋が米にも手を出す ○大正12年ごろのビルマ
- 人情家髭將軍 ○ビルマ米の大量輸入 ○家庭を犠牲にして再任 ○日本の諜報機関

*ある日、新任の若い社員がランゲン支店に赴任してきた、部屋へ入るとカイゼル髭將軍が最も立派に見えたので、髭將軍こと谷垣琢磨の前にすすみ、深々と頭を下げ着任の挨拶をした。將軍は「ご苦労！」と返した。支店長は苦虫を？み潰した。－中略－ 若い社員を可愛がり面倒も見た將軍は昭和19年ビルマ北辺の激戦において、將軍らしく戦い、散華された模様。

第2章 宣戦の詔勅と共に

- 脱出遅れて囚われの身となる ○ペゲー進撃 ○シットン河を渡る ○表彰状に輝いた森田丹
- 捕虜となって ○三たびビルマで働く運命 ○大洋丸沈み 東シナ海に泳ぐ ○空襲をうく

*昭和16年開戦前に多数の駐在員はビルマを去ったが、残った3名が12月8日未明に抑留されることとなり、ランゲン北方約10^{km}にあるインセン監獄へ送られた。

*昭和17年1月31日モールメンを占領（第55師団） 3月8日ランゲン占領 5月1日マンダレー占領

*森田丹は第55師団に属し、乗馬でしばしば師団の先頭に立ち、ビルマ領に入るや、流暢なビルマ語通訳にあたるのみならず、地理地形に明るく軍にとって有利な進路を案内し、師団の進撃に多大の功績を残した。－中略－ これらの功績に対し竹内師団長は表彰状を贈り、囑託を解いた。

*昭和17年5月、社命によりビルマへ出発する事になった。当時、マネさん（豊間根篤行）が「こういう貿易会社に入ったら、一日も早く海外に出なきゃ駄目だよ」と言ってくれた。船は大洋丸、日綿総数20名の他、軍人軍属数百名が宇品から乗船した。我々青年社員はデッキ上の2等喫煙室、偉い方々は上等の船室、これが運命の岐路となる。－中略－ 東シナ海で敵潜水艦の魚雷で直撃された。船室の偉い人達は即死、或いは船室に閉じこめられ亡くなったらしい。デッキ上の私達は容易に脱出できた。忘れもしない5月8日午後7時ごろだった。20名のうち生き残ったのは私を含めてわずか7名であった。－後略－

第3章 日綿かく働けり

- ビルマの産業を指導する ○カナントー精米所 ○米穀組合を担当して ○美人のナンシー
- 日本ビルマ木材組合 ○紡織娘と船大工 ○ビタミン栄養食が生まれる ○車と兵器の工場長
- 迫撃砲弾の外核を製造する ○丸永商店の業務 ○ふりかけ食を作る

*新福さんが通ればナンシーが手を振る。父が英緬のハーフで母親がビルマ人。－中略－ ナンシーは今で言う若い日の「雪村いずみ」のように可愛い顔の娘さんだそうである。－後略－

*ビルマのチーク材は昔も今も船舶用や家具用の一級品としてビルマでは米に次ぐ財産であった。

当時の日綿実業ビルマ事業（松岡啓一ラングン支店長報告：回顧録78～79ページ）：

ビルマにおけるわが社の事業について

次にビルマにおけるわがラングン支店および配下の出張所の営業につき概略を申し上げますと

- 一、ラングン支店 当初は軍政監部、後には森軍司令部の経理部、同貨物廠、兵器廠、自動車廠および海軍局並びに海軍部隊との関係において、六つの精米所をはじめ、ガラ紡工場、造機、造船、製粉工場、澱粉工場、メリヤス織布工場、麻袋工場、米糠搾油工場の経営、脱脂綿、乾燥味噌、ヴィタミン栄養食の製造、土帛製織、その他各種資材の集荷売買を行いました。又、木材組合に四分の一、米穀組合に二分の一の資本をもち、麻組合、物資配給組合にも投資していました。
- 二、モールメン出張所 精米工場、木造船所の経営、粗集荷、その他土産物の集荷および資材の売買
- 三、パセイン出張所 精米工場および鉄工所の経営、粗集荷、その他土産品 資材の集荷
- 四、ミンチャン、マライン、イエヂョー、ナトヂ、ウエルー各出張所 練綿工場の経営、綿花、雑繊維、雑穀の集荷、土帛の製織
- 五、カロー、タウンヂー出張所 澱粉、製粉工場の経営、味噌醤油、ジャム、乾燥野菜の製造、小麦、馬鈴薯、ミカン、その他の土産品の集荷
- 六、モンナイ出張所 紙の製造、土帛の製造、ひま、雑穀の集荷、綿花栽培の指導

- 七、マグイ出張所 マレー向けビルマ米の中継、ゴム、木炭、その他土産品の集荷
- 八、タポイ出張所 粗の集荷、精米、雑繊維および土産品の集荷
- 九、モーピン出張所 粗の集荷、麻栽培
- 一〇、ヘンザダ出張所 麻栽培、麻袋工場経営
- 一一、ピヤボン、ボーガレー、チョンマゲ、ダネピウ、ラプタ各出張所 粗の集荷
- 一二、ペグー、ワウ、ダイウ、タイピン、ニャンレピン、ピウ、トングー各出張所 粗の集荷を目的として開所

中召集さる。

- 一三、マンガレー出張所 土帛の製織、雑穀土産物の集荷、インキ、ハッカ製造、その他、チャウセにて味噌油を製造
 - 一四、シュエボー出張所 雑穀その他土産の集荷、味噌油、陶器の製造
 - 一五、タワラヂ出張所 土帛、麻袋代用品製造
- ラングン支店としては足が地についた将来性ある生産事業に重点をおいていましたが、上記営業種目に現われています通り若干一時的の事業にも手をつけています。これは軍の要望もだしがたく、やむをえず引受けたためで政策上やむをざるものであります。

第4章 地方における活躍

- モールメンでの事業 ○マンガレー米穀組合 ○インパールへの作戦基地シュエボー店を開く
○タウンヂーの丸永 ○メイチラ県の綿作地の模様 ○馬上ゆたかな美少年 ○強盗に護衛される
○ビルマのお正月(水祭り) ○私を食べたがった山岳部族の子 ○モールメンヒルの月

*タウンヂー丸永：鉄工所、製薬所、乾燥野菜製造、製塩、生鮮野菜を軍へ納入、軍用道路工事、養鶏、陶器製造、自動車用バッテリー製造、など。 筆者注：昭和29年、丸永と日綿は合併

*昭和18年8月1日、新興ビルマ国独立

*昭和19年3月8日、インパール侵攻作戦開始

*痒いと思ったら足の甲に山蛭が何匹も吸付いてる。急いで指で取り除こうとするが、ぬるぬるしてなかなか採れない。小枝で擦落としたら血が滲み出た。濡れた足の甲が條となって血の跡がついた。

*ツウ・ガ・チドウ サーデンデー = (彼の 脚を 食べたい)

第5章 戦況暗き日

○インパールよりの敗退 ○貨物廠の囑託として前線へ ○内海清君仆れる ○タンビザヤでの初年兵教育 ○インパール作戦失敗よりイラワチ会戦 ○空爆を冒して ○車を焼かれる ○マンダレーよりの脱出 ○マウント・バッテン将軍からの招待状 ○一足先にサイゴンへ

*昭和19年4月6日コヒマ占領、インパール北方10^{キロ}まで肉迫するも、英軍・中国軍反撃開始

*昭和19年7月5日インパール作戦中止命令、インパールより敗退。雨季、物資不足で困窮の極み。

*バッテン将軍：「日本軍の皆さん、暫く戦いをやめ話を聞いてください。・・・“アイサレンダー”と呼んで只今こちらにおいで。連合軍は捕虜として手厚く君を迎えます・・・、放送を終わります。こんどは壕深くにかくれてください 砲撃にうつります」

第6章 戦火の中に咲いた花

○コメの町 チョンマゲ ○日本語を話す娘 ○あわただしいランゲン ○勅輸送会議 ○妹 マバイ ○招集令来る

*・・・寒気に襲われ、ガタガタ震え、毛布を三枚被ってもなお寒い。次に身体中が燃え上がってきて、全身から汗がタラタラ流れ出す。検温すると42度。インド人の医者曰く、“マラリアです”と言いながら貴重な薬を注射してくれた。頭は割れるように痛い。息は火焰のようである。あらゆる関節が表現できぬほど痛い。マバイがタオルを絞って頭に乗せ、あちこちをマッサージしてくれた。日暮れ近く、やっと熱が下がった。翌日は不思議と平熱になりケロリとした。・・・

*ビルマの雨季：降り続く雨で視界が霞み遠方の続く峰に白く浮かぶ仏塔（パゴダ）、群れた水牛が水田に漬かり、背に2羽の白鷺を宿して水面にその姿を映している。

第7章 末期的症状に陥って

○ビルマ軍反乱す ○指川侃さん殺さる ○大西京さんとの別れ ○招集令状を受ける ○老少尉軍服を着る ○ランゲン市内警備 ○英印軍既にトングーに入る ○シッタン河を泳ぎ渡る ○さらばランゲンよ ○兵器廠と共に撤退 ○忘れじ4月28日 ○偕行社に火をつけて ○英軍捕虜にこっそりと

*昭和20年4月23日、日本人婦女子、ビルマ要人達、非戦闘部隊は先を争って、陸路、海路でモールメンへ、日綿では山田文治、高橋、森貞、森田、平田、池田、北島などは無事に、水野は負傷したものの無事だった。

*昭和20年4月26日、ランゲンに残っていた最後の参謀が飛行機でモールメンへ転進。参謀を乗せた飛行機は兵舎上空を3周して東方指して消えていった。これが友軍機の見納めになるうとは思ひもよらぬことであった。方面軍は商社部隊をしてランゲンを死守せしめようと、旅団長松井少将に対して、「旅団は速やかにランゲンに反転して同地を死守すべし」と、・・・“部下を残し、参謀逃亡”と解釈される。併し、5月9日に死守の任務を解いた由である。

第8章 モールメンへの死の転進

- 苦難の行軍始まる ○デルタよりの転進 ○ラングンへ斥候を放つ ○ラングン市内へ潜入
○モービ飛行場での交戦 ○商社マン グルカ兵と戦う ○機関銃で弔い合戦 ○スパイを殺せ
○食える植物を探す ○自爆第一号 ○豪雨の中を ○日綿社員次々に仆れる ○雨季の転進

- *二等兵（九州佐賀県出身の若者）の死、“隊長殿 一寸便所へ行きます”と言って裏山に上がり、いつまでも戻らないので、心配しておったところ、山上で手榴弾が爆発する音が聞こえた。山へ駆け上がったところ、胴体が真っ二つに飛び散り、無残な状態・・・
*ビルマの竹は日本の孟宗竹の3～4倍の太さで、高さは倍ぐらいある。日本の竹は一本ずつがスナリと生えているが、ここでは数十本の竹が群生しており、奥は見えない。この一株は大人4～5人が両手を広げて周囲を囲めるほどで、一本の太さは30cmぐらいある。

第9章 マンダレー街道見ゆ

- 水田の中を懸命に ○悲運の原大隊長散華す ○一日遅れて街道を突破 ○小舟を探して
○久しぶりの料理 ○白骨街道を上り下り ○ようやくゴム林へ ○友軍陣地に入る

- *・・・道の両側に多数の兵隊が腰を下ろしている。寝ている者も多い、目を大きく開いたままの兵もいた。谷川に下るとそこでは折り重なった死体があった。死体はまるで石ころのごとく我々のまわりに転がっていた。手榴弾や小銃で死んでゆく人はまだ体力のあるうちで、白骨峠では体力を消耗し尽くした兵士達が道端にへたり込み、そしてそのまま寝るように死んでいくのであった。

一中略 「おい頑張れよ」「もうだめです。先に行ってください」という。どう動かそうとしてもだめだった。あの地であのまま死んでしまったと思う。

注) 編集者による主な企業の駐在員数と戦死者

| | | | | | |
|-------|------|-----|-----------|------|-----|
| 日綿實業 | 183名 | 49名 | 大建産業（伊藤忠） | n a | 40名 |
| 三井物産 | 83名 | 33名 | 朝日新聞 | n a | 47名 |
| 三菱商事 | 163名 | 36名 | 横浜正金銀行 | 40名 | 4名 |
| 安宅産業 | n a | 18名 | 富士紡績 | 145名 | 32名 |
| 東洋棉花 | 44名 | 12名 | 千田・岩井 | 100余 | 22名 |
| 日華油脂 | 25名 | 12名 | 西本組（三井建設） | 16名 | 1名 |
| 日本通運 | 190名 | 58名 | 読売新聞 | 40名 | 5名 |
| 帝国ホテル | 14名 | 3名 | 江商 | n a | 5名 |

第10章 戦い敗れし日

- 一人トボトボと ○入江少尉に終戦を聞く ○疲労困憊の友を迎える ○泰緬鉄道でバンコクへ
○サイゴンにて終戦を知る ○帰国の日近きを祈って ○蘇生の思いで菓子屋を ○竹の柱にニッパ屋根
○生きて帰れた三つの幸運 ○戦友よ 商社部隊の働きは無駄ではなかった
○亡き戦友のために法要を ○万国博 ビルマの日

- *大阪万博“ビルマデー”でのネ・ウイン將軍の挨拶抜粋：

・・・ビルマ・パピリオンが博覧会のテーマに描かれたのが協力の事例であります。ビルマに好意を寄せられる旧軍人や縁故者の皆様が、わがパピリオンの為に日時と努力を捧げられた事は、わたしの大きな喜びとするところであります。この機会にわたしはビルマ国民と私自身のために、皆様に心から感謝の意を表したいと思ひます。

回顧録発行時に内地で存命されておられた方々（旧ランゲン支店職員機構一覧表から）

| | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|--------|-------|
| 森田 丹 | 西山 博 | 奥田 莊三 | 和田 巖夫 | 山田 文治 | 秦 豊政 |
| 高橋 義数 | 真田 繁治 | 藤田 義之 | 蒲生 清郷 | 山田 義一 | 吉島 晴人 |
| 石川 幸造 | 池田 俊彦 | 森貞 信親 | 水野 慶雄 | 小松 幸一 | 高橋 喜三 |
| 矢部 忠勝 | 栗岡 栄 | 土井 一郎 | 高見 永二 | 吉岡 辰夫 | 辻岡 登 |
| 佐藤 清司 | 中財 大雄 | 友部 隆 | 久米 忠雄 | 北島 輝 | 佐久間利秋 |
| 渡邊千代太 | 越智義市郎 | 浅原三千夫 | 三原 史郎 | 関谷 和夫 | 飛鳥井武代 |
| 山本 輔一 | 赤澤 政弘 | 尾西 秀雄 | 伊藤 歳男 | 佐々木民二郎 | 黒田 五郎 |
| 鈴木 剛吉 | 高橋 力雄 | 楠本 敏雄 | | | |

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

最後になりましたが、回顧録には記述されていない「牧洋生様（社友会会員、昭和9年7月生）からいただいたお父上の牧秀之助様の現地での日本軍との関わり」を紹介したいと思います。

QTE

父秀之助は、1901年（寅年）京都府福知山生まれ、福知山中学、第三高校から東京帝大英法科、在学中に外交官高等試験合格、外務省へ進むが、昭和2～3年頃に同郷であり、大学並びに外務省の先輩であった芦田均さん（後の総理大臣）に相談結果、日本綿花を推薦されて途中入社した。

ほどなく、印度駐在へ。昭和元年結婚し家族帯同して再度印度へ赴任。各地で綿花買付けなどを担当した。

印度マドラス州の王様（マハラジャ）から「虎撃ち」を許可され、虎を仕留める。英国の雑誌「SHOOTING」では、“日本人の虎撃ちは紀州の徳川公以来二人目”と紹介された。入社ほどない若者が「何故、印度で虎撃ちできたのか」は、当時印度では地方王族が綿花の作付け収穫情報を一手に握っていたとされており、彼らとの緊密接触で印度綿花情報を一気に入手でき日本綿花の綿花買付け、輸出に重要な情報を得たためと思われる。



昭和16年の大戦勃発時も印度に単身赴任していたが、間もなくビルマ方面にも携わり日本国家の肝入りで「日本ビルマ木材組合」の理事長となり、チーク材の日本向け輸出に貢献したらしい。更に、インパール作戦前段階で、密林では虎や凶暴な野獣が出没するので軍部より虎撃ちの経験を買われビルマ各地の山岳地帯を案内していたという。

どうやら、印度の友人を通じて英米の進撃情報の入手、ビルマ慰撫工作、ビルマ有力者、新興のビルマ国民軍の動静、機密情報の把握など、謂わば「裏の、影の協力」をしていたようです。

密林内の激務などで体調を崩し、軍用機で青島経由九州に一時帰国、東大の医者仲間に診断を仰いだら詳細分からず昭和18年5月死亡。解剖結果、南洋ばい菌による「肝臓膿瘍」と分かった。民間人がめったに利用できない軍用機で帰国できたのは、軍部にとって重要な人物だったのかも。

父のビルマ赴任中、何度か日本あてに手紙が届いた。日本軍部の検閲を受けたのか千切れ千切れの手紙の中に「日本は間もなく猛爆を受ける可能性あり」と読み取れ、しばらくして親戚一同疎開を始めました。その後、日本各地が猛爆を受け、敗戦に至ったが親父の手紙通りになってしまい、残念至極である。しかしこのような状況の中で冷静に事態を見つめていた日綿人がいたということは記憶しておいてもいいのではなかろうか。

牧 洋生

UNQTE

おわり

会員寄稿文

インド太平洋経済枠組み (IPEF)

中 川 十 郎

5月に日本を訪問したバイデン米国大統領は23日に岸田首相との会談、24日のQUAD（米国、豪州、インド、日本）の首脳会談で、IPEF（Indo Pacific Economic Framework=インド、太平洋経済枠組み）なる米国の新たなインド太平洋戦略を提案した。これはトランプ大統領時代に米国が撤退したCPTPP（包括的斬進的環太平洋連携）に代わり21世紀に発展するインド、アジア太平洋諸国を取り込み、中国の広域経済圏構想Belt & Road Initiative（一带一路戦略）への対抗軸にしようとのバイデン政権が主導する新たな太平洋通商貿易戦略だ。

アジア太平洋地域で米国が中国に対抗すべく米国主導のインド太平洋大経済圏IPEFの正式交渉となる初の閣僚級会合が9月8日ロスアンゼルスで開催された。

日本を含む全14カ国が参加した。経済面でも近年とみに存在感を強める中国への対抗を念頭に、米国が経済安全保障の協力関係を強化する狙いがあるものとみられる。

IPEFには日米豪印、韓国、ニュージーランドのほか21世紀に急速に発展しつつある東南アジア諸国連合（ASEAN）からもインドネシアなど7カ国、さらに南太平洋のFijiを含む14カ国が参加した。

IPEFは①デジタル経済を含む公平な貿易の推進。②半導体などのサプライチェーン（供給網）強化。③脱炭素に役立つインフラ整備。④税逃れや汚職防止の4分野を柱としている。

（東アジア）地域包括的経済連携（RCEP）から脱退したインドはIPEFでも貿易分野での交渉には不参加を表明。2023年にも中国を抜き、世界最大の人口国となり、ITを中心とする情報分野でも躍進しつつあるインドは伝統的に全方位外交を目指している。

9月15～16日ウズベキスタンで開催された中国、ロシア主導の上海協力機構（SCO）にはインド太平洋の有力国としてインド、パキスタンが参加。インドは国連のウクライナ侵攻ロシア非難決議にも参加せず、伝統的な非同盟、中立的な立場を保持している。

21世紀前半は中国の時代、後半はインドの時代としてポストチャイナの有力国として急速に浮上。脚光を浴びつつあるインドの動向に日本としてはさらなる注目が肝要だ。

アジア経済に詳しい朝日新聞の吉岡桂子・編集委員によれば、①米国が中国への対抗で創設したIPEFの成否はASEANの支持がカギをにぎる。②中国の一带一路はピークアウト。インフラ整備などで共通ルールに取り組む好機だ。③アジアの経済連携は重層性が強み。

多くの枠組みに参加する日本は媒介役を目指せと含蓄ある卓見を披歴しておられる。（朝日8月29日）。筆者も同感だ。15カ国参加のRCEPは経済規模32兆ドル、TPPは11カ国で12兆ドル。10カ国参加のASEANは3.4兆ドルだ。これに比しIPEFは14カ国ながら経済規模は39兆ドルと最大だ。21世紀に発展するアジア太平洋に於いては米中の二大国が対立するのではなく聖徳太子の『和をもって尊となす』の精神で「競争と協力」を目指すべきだ。

会員寄稿文

昔話 ペーチャと父親ルドルフ

高木 恒久

あれから、かれこれ50年が過ぎようとしている。私はモスクワに勤務していた。朝、公団から電話があって、相談がある。直ぐ来てもらえないか、という。私は、ホテルの前のタクシー乗り場に行ったが、空車は一台もなく、仕方なく大通りに出て白タクを探すことに。白タクは一応禁止だが、レーニンの昔から需給緩和に役立つと、むしろ奨励されてきたという。車の流れに目を遣ると、向こうから綺麗な枝豆色の「ボルガ」がやって来たので、私は手を上げて車を止めた。

「スモレンスカヤ広場！」と運転手に行き先を告げると、青年は「オッケー」と云って前の座席横のドアを開け、「どうぞ」という。同じボルガでも一見して高級車仕様だと分かった。運転しているのは20歳くらいの青年だった。彼はアクセルを踏みこみながら「旦那は、若しかして日本人？」と聞くので「そうだよ、日本人だ。」と答えると、青年は嬉しそうに「僕のママも日本人だ」と調子を合わせるように云った。「嘘だろう、日本人の顔してないよ。日本人に金髪はいないし」と私。彼は云う、「生みの親はロシア人だけど、親父が離婚して、その後日本女性と結婚したんです」。

信号で停車していた車を青信号で発進させたとき、私は気づいた。「この車、発進力が凄いね」。彼によれば、特別仕様で6気筒だそうだ。私は初めて知った。タクシーと同じボルガでも6気筒車があるという事を、きっとこの車の持ち主は相当な地位の人なのだろう。今、ひとりの日本人が秘密警察の枝豆色の車に幽閉され、若い運転手がどこかに運んでいるという心配すべき事態かも知れない。落ち着こう。周囲の状況に注意しながら、自分に言い聞かせた。

日本人がモスクワに駐在する間に、モスクワの女性と結婚するケースは幾らでもあるが、ロシア人が日本人の嫁さんを娶った話はとんと聞いたことがない。自由を捨ててまで。

車がレールモントフ広場まで来たところで、青年は車を右折させサドーボエ環状通りに入った。「君のお父さんは学者かなあ？ 日本で通訳の女性と巡り合ったとか」。私は訊いてみた。青年は反射的に、「いえ、音楽家です」「ああそうか、音楽家か。じゃあ、バルシャイ!?!」彼は「その通り」と云って、「シマッタ!」と云ったが、日本人が隣に座り、話始めると気持ちが緩んでしまったという。「小父さん、この話秘密にしてください。お願いします。この車も親父のものを黙って使っていることがバレたら、大変なことになる」という。私は、「心配無用。誰にも言わないと約束するよ。世話になった君に迷惑かける道理はないよ」。そして、「君のお父さんは厳しいんだろうね」。「はい、もの凄く厳しいです」。

私はロシアの親しいホルン奏者から聞いたことが有る。「バルシャイはサディスト!」だと吐き出すように云ったのを覚えている。この青年にそんな話は出来ないの、別の話をした。「去年の秋、君の御父さんがベートーヴェンの7番を振るのを聴いたよ。ちょっと速めのピッチで始めた。一糸乱れぬ弦の束、管楽器群がピタッと一本になった時の音の膨らみ、音色。素晴らしかった。忘れられない」と私は彼のお父さんの指揮ぶりを思いだして、話した。

彼は、「父親は数学の天才なのです、工科大学で飛行機の設計を研究するはずでしたが、好きな音楽の道に進んだのです。」青年は自分を「ペーチャ」と名乗った。「ペー

チャ、もっと話を聴いていたい、もう目的地に着いてしまったよ。これは全部取っておきなさい。また会えることを期待するよ。「小父さん、有難う、御元気で」。「ペーチャも元気でな」。その後、街に出るたびに「枝豆色」の白タクを期待したが、巡り合うことはなかった。

数か月後、大ホールでレオニード・コーガンのバイオリンコンサートがあり、出かけた。大ホールは満席だった。アントラクト（中休み）にロビーに出たら、大勢の人の中に、ヨーコちゃんが、お母さんと一緒にいるのが見えた。1958年、コーガンが来日した時、5歳だった天才少女が、コーガンの前でチゴイネルワイゼンを見事に弾くのを私はそばで聴いた。コーガンは7歳になったら招待するのでモスクワにいらっしやいと言ひ残し、モスクワに帰って行った。

あれから10年がたつ。佐藤陽子は声楽にも優れた才能を発揮し、音楽院卒業後、マ

リア・カラスの指導を受けたとも聞いた。そして、画家の池田満寿夫と結婚した。

ロビーにはペーチャの父親であるルドルフ・バルシャイが私と視線が合うと、こちらに歩いてくる。

瞬間、ペーチャに迷惑はかけられないと、視線を外した。私の取り越し苦勞だったようで、バルシャイは人違いをしたようだ。歩行を止め、私の方には来なかった。後半が始まった。ブラームスのソナタ3番だった。続いて、アンコールにパガニーニの前奏曲など6曲弾いてコンサートは終わった。然し、拍手は鳴りやまない。私はホールの重い回転ドアを押し開けて外に出ると、チャイコフスキーの石像の下に、数台の車が駐車しており、そこに、あの「枝豆色」のボルガがあるのが目に入った。

おわり

広報チーム注：佐藤陽子さんは2022年7月19日に他界されてます（享年73歳）



ルドルフ・バルシャイさん 1924年～2010年

出所：ウィキペディア

「俳句の会」いろは句会

佐 藤 英 二

長寿の「いろは句会」句集を今回もお届けします。当句会は本年9月に第394回を終了し、発足以来30年を超える歴史のある会です。

新型コロナウイルス感染状況も第7波は徐々に落ち着いて来ましたが、年末に向けてまだまだ予断を許さず、メール交信による句会も2年半を超える長期に及んでいます。

雑談を交わしながらの対面句会に一日も早く戻れる日を祈りながら、今回も各会員の自薦句（本年4月～9月）3句をお届けします。（氏名は50音順）

持ち上げて色を確かむ苺かな
睡蓮の茎に羽化待つ水蠶の影
秋めきてワイングラスを交はす音
宇治田薫風

うららかや道祖神にも一礼し
新墨のひと文字の香や聖五月
深夜便切れ切れに聞く熱帯夜
久保田悦子

うたかたの恋にも似たり散る桜
三年ぶり笑顔溢るる祇園の会
猛暑にもめげず路傍の名無し草
佐藤 英二

花冷えの空に隙間のなかりけり
夏草や一湾の波おだやかに
どくだみの静かすぎたる花盛り
下川 泰子

峰雲や昭和はすでにふたむかし
谷の音たたみこまれし宿浴衣
卓上の氷菓溶けゆく長電話
福島 有恒

おはよーと子らの挨拶夏来る
梅雨上がるあずさ5号は安曇野へ
彼の地にて止まぬ砲火や秋暑し
藤野 徳子

万緑や思ひ知りたるわが非力
ちちははも姉も蛍になりました
星月夜駅に迎へに来てと妻
堀部 暁

海鳴りの宿の一夜や朝風げり
帰宅児の髪に纏わる炎気かな
風に聞く秋を彩る山便り
山田珠真子

ニチメン香港会2022 開催報告

本間 均・森 誠

第17回を迎えたニチメン香港会を2022年10月15日に開催しました。コロナ禍で開催を控えてきた為3年振りの開催となりました。

元々はHKAOQ杉本佳久さん（元専務、故人）を囲む会として2001年に始まった集いですが、その後ニチメンで香港および華南に駐在していたメンバーを少しずつ発掘しながら現在に至っています。

現時点で双目に残っている世代、メンバーは既にマイノリティとなっており悠々自適の大先輩方、新しい分野で活躍の皆さん等と共に集まることで香港・華南時代の武勇伝や英国統治時代の古き良き香港の再評価するのみならず将来に向けたアドバイスを戴く良い機会となりました。

今回は登録会員75名に対し21名の参加で（過去2番目に多い！）大いに盛り上がりました事報告致します。サプライズ参加の御仁や昼会なのにしっかりお酒で出来上がる御仁等、多士済々での2時間+アルファでした。

開催場所は第16回に続き今回も素敵な外苑前のイタリアン。「予約が取れない料理教室」で有名な加藤政行シェフ（あの料理の鉄人巨匠落合務の愛弟子）が腕を振るうお店「セントベネ」です。

我々は「味の判る大人」の振りをしながら旧交を温めました。でも「どうして、広東料理では無くイタリアンなの？」実は多彩で多才な人材を擁している香港会のメンバーのひとり瀬川勲さんが経営しているお店のひとつで、こちらをホームのような感じで貸し切りで使わせて戴いています。

ニチメン香港会は長老格の岡島岩男さん、青木政和さん、石原啓資さん（ニチメン東京社友会会長）に指南を戴きながら特に会則を定めず緩やかな会として運営しています。

ニチメン時代に香港・華南地区で駐在・赴任されていた方々で当香港会にご興味をお持ちの方は是非ご連絡下さい。「あの人も該当するんじゃない？」という方をご存知の方もご連絡戴けると幸いです。

名誉幹事：82年入社 本間 均

幹 事：83年入社 森 誠



溝江博三氏をしのぶ

中 川 十 郎

ニチメンを退職後、経営学部教授としてお世話になっていた東京経済大学同窓会誌「東京経済」2022年7月号で溝江博三先輩の訃報を知り心よりお悔やみ申し上げる次第である。

溝江先輩には50年前のニチメンニューデリ駐在時代から40年前のカルガリー出張員時代に大変お世話になった。その後、さらに東京経済大学のご縁でも二重のご縁ができ親しくご指導を頂いた。ニューデリ駐在時、ブラジル向けバングラデッシュ製砂糖用ジュートバッグ入札では、元ダッカ駐在員として活躍されたとのことで、ニューデリにご出張の際、種々ご指導を頂いた。これが溝江氏との最初の出会いであった。

筆者はバグダッド駐在、ベイルート長期出張、ニューデリ駐在、ブラジル・リオデジャネイロ支店、サンパウロ本店駐在を経て12年ぶりに帰国。業務部米州課長を拝命。当時の金田業務本部管掌専務のご指示で、カナダ・カルガリー出張を命じられた。主目的はニチメンのエネルギービジネス開拓のためカナダの石油、ガスビジネスへの介入を図ることだった。

たまたまマレーシア・国営ペトロナス公団向けガスパイプライン建設大型商談に際し、カルガリーのガスエンジニアリング会社・NOVA社と交渉し、ペトロナス向け代理権を取得せよとの宮本取締役機械本部長よりの指示が舞い込んだ。

その窓口取得交渉支援に東京機械プラント本部から溝江博三先輩が派遣され、二人で交渉の末、窓口取得に成功。ペトロナス向け100億円のガス・イプライン敷設工事落札に成功した。筆者はその後、ニューヨーク駐在帰国後、思うところあり、早期退職し、愛知学院大学商学部教授の公募に応募、合格。6年後、東京経済大学に新設の経営学部・流通マーケティング学科、及び経営

大学院教授として東京経済大学にお世話になることになった。

同大学貿易研究会顧問を仰せつかり、貿易研究会が開催された。その会合にOBとして参加していた溝江先輩に再会。不思議なご縁を感じた。溝江氏は東京経済大学英語研究会ESSで英語を研鑽。さらにニチメン豪州にも駐在経験あり、その英語力は抜群であった。そのこともあり、東京経済大学貿易英語の講師をお願いした。先輩のその流ちょうな英語力に後輩の学生諸君は強い感銘を受け、先輩を見習いたいと英語の勉強に精出した。

2006年3月、筆者の退官記念講演のあとの送別会で、溝江氏が結成したという東京経済大学楽団の演奏をバックにお得意の英語で、名曲の数々を熱唱いただいたことを今もありありと思い出す。溝江氏は昭和32年ニチメン入社で、筆者の2年先輩でお世話になった。

ニチメン社友会の席で会うと、豪州駐在時好きになったという赤ワインのグラスを片手に『中川さん元気か。カルガリー時代が懐かしいね』と楽天的で、朗らかな笑顔でいつも声をかけられていたことを思い出す。溝江博三先輩どうぞ安らかにお休みください。

合掌



左から3人目が故溝江博三氏、左端が筆者

◎ 会 員 動 向

新規加入者（敬称略）

なし

退会者（敬称略）（2022年度）

西村 輝男

資格喪失者（敬称略）（会則11条3項により、会費を2年間以上未払の場合が該当いたします。）

なし

連絡が途絶えている方（敬称略）

（連絡先をご存知の方は、事務局までお知らせ願います。）

石川勝美、上野通明

新入会員募集中

皆様の周りで未加入の方がいらっしゃいましたら是非勧誘いただきたく思います。

本会の会則に同意して、会費を納入頂けるなら会員になれます。

（ニチメン、ニチメンの関連会社に在職したことのある方が対象になります。）

◎ 2021年度(2021年7月～2022年6月)年会費(3千円)入金状況とお願い

2021年10月31日現在

| 会員数 | 入金済会員 | 長寿会員(註1,2) | 終身会員 | 未納会員 |
|-----|-------|------------|------|------|
| 403 | 228 | 73 | 12 | 90 |

** 2021年度分未納者数 ** 12

尚、来年度（2023年7月～2024年6月）年会費 納入済の方→ 25 (註4)

お願い：

2021年度会費を未納付の方は当年度会費と合わせ至急の納付にご協力下さい。

2020年度分未納者は資格喪失となります。大至急21, 22年度分と合わせて納付頂くようお願い致します。

当会会則第11条の規定により2期分の会費未納者は会員資格喪失となります。

振込先は、下記いずれかを利用して下さい。(振込手数料は各自ご負担願います。)

1) 郵貯銀行

口座番号 : 00100 - 4 - 318041

口座名義 : ニチメン東京社友会

2) 三菱東京UFJ銀行 東京営業部

普通口座

口座番号 : 8225155

口座名義 : ニチメン東京社友会 代表 石原啓資

振込に際しましては、振込者名欄にご自身の名前を最初に左詰めで記載願います。

(ネンカイヒ、ニチメン、XXネンドカイヒ等の記載があると振込者名が通帳に記載されず、振込者が特定できません。)

(註1) 長寿会員は年会費免除になっておりますが、長寿会員からご送金を頂いた場合は当会へのご寄付とみなし処理させていただきます。(会運営上大変助かります)

但し、何らかの手違い等であれば事務所までご連絡下さい。

(註2) 長寿者氏名：(50音順 敬称略)：

青木繁行、阿賀信夫、石川勝美、石原靖造、糸井康雄、伊藤安雄、入野英次、岩居宏一、宇治田薫、海野敏夫、大久保海生、大崎隆三、大谷毅丈夫、大塚静子、大場禎治、大村善勇、大森啓作、河西良治、勝田泰司、上條達雄、川畑正巳、木内純一、倉又則夫、栗田久彌、古藤彰三、小林斉之助、近藤貞一、斎富造、坂井良司、桜井潤一、三分一克美、柴田実、渋谷義、島田俊彦、菅谷省三、高木恒久、高瀬裕、高田秀子、田尻眞啓、伊達邦雄、津田賢一郎、永井清光、中川十郎、西奥薫尚、西田昇、西村弘、野城恒男、芳賀信明、橋爪覚、林義人、平岡昭三、廣瀬一彦、廣田雄太郎、深尾孝、福富直明、堀江亘、牧洋生、松田邦夫、松田實、松村信男、松本寿夫、三浦甲蔵、水庫博夫、宮内義彦、三宅葉、宮田信雄、村井靖武、村上匡一、八津道夫、山岸正雄、山田寛治、吉田孝生、吉本邦晴 以上 73名

(註3) 終身会員 (50音順 敬称略)

入江隆史、岩田功、大羽陽一郎、奥村睦夫、唐崎和彦、木寺厚二、新藤孝、千田俊章、土橋昭夫、中田龍彦、榊山俊次、宮本正博 以上12名

(註4) 2023年度(2023.7～2024.6) 年会費納入済会員 (50音順敬称略)：

<<来年度は、振込不要になります。再来年に、22年度分の振込をお願いいたします。>>
青木政和、赤城枝美、赤澤宏哉、芦村八郎、甘利廣、石原啓資、大山陽子、黒住厚、坂井辰雄、高橋卓子、田上桂作、田中弘、西川洋、西野幸夫、野本定男、服部輝夫、細井吉一、松村森男、松本宰子、水野英幸、水堀勤、箕作武彦、宮尾迪子、安井修司、山口一光 以上 25名

(註5) 2022年7月以降で寄付をいただいた方々

吉本邦晴、田尻眞啓、入野英次、野城恒男、菅谷省三、津田賢一郎、林義人、永井清光、中川十郎、松村信男、村井靖武、倉又則夫、三分一克美、宇治田薫、三浦甲蔵、牧洋生、西奥薫尚、望月泰子(昌徳夫人)、石原靖造 以上 19名

訃 報

(前会報報告後～2022年10月 連絡を受けた方々)

ニチメン東京社友会

※非会員

| | 氏 名 | 出身部門 | ご逝去年月日 | 享年 |
|---|----------|---------|-------------|------|
| 1 | 溝 江 博 三 | 機械プラント | 2022年 1月20日 | 88歳 |
| 2 | 望 月 昌 徳 | 繊維・機械 | 2022年 4月27日 | 101歳 |
| 3 | ※坪 内 弘 志 | 機 械 | 2022年 3月26日 | 76歳 |
| 4 | ※日 原 東 洋 | 合 成 樹 脂 | 2022年 7月 9日 | 85歳 |
| 5 | ※高 木 常 吉 | 通 信 部 | 2022年 8月12日 | 81歳 |

ニチメン大阪社友会

※非会員

| | 氏 名 | 出身部門 | ご逝去年月日 | 享年 |
|----|----------|---------|-------------|-----|
| 1 | ※原 文 恵 | 綿 花 | 2022年 5月24日 | 74歳 |
| 2 | 山 口 鎮 夫 | 機 械 | 2022年 7月13日 | 83歳 |
| 3 | ※松 井 啓 暁 | 人 事 | 2022年 5月23日 | 84歳 |
| 4 | 横 山 隆 | 織 維 | 2022年 2月 6日 | 83歳 |
| 5 | 北 村 謹一郎 | 織 維 | 2022年 6月10日 | 77歳 |
| 6 | 沢 田 太 郎 | 機 械 | 2021年12月27日 | 96歳 |
| 7 | 森 田 育 宏 | 合 成 樹 脂 | 2022年 8月 9日 | 81歳 |
| 8 | 田 中 敏 夫 | 紙 パ 物 資 | 2022年 2月19日 | 82歳 |
| 9 | 山 本 峻 | 業 務 部 | 2022年 9月30日 | 90歳 |
| 10 | 石 井 俊 彦 | 名古屋審査部 | 2022年10月 2日 | 91歳 |
| 11 | 金 岡 徹 | 織 維 本 部 | 2022年10月12日 | 93歳 |
| 12 | 三 宅 要 | 織 維 本 部 | 2022年10月25日 | 82歳 |

ご冥福を、お祈りいたします。合掌



【編集後記】

会報」33号をお届け致します。はるかアフリカ・ルワンダからのご寄稿をはじめ、多くの方から貴重なご寄稿をいただきありがとうございました。

数年続くコロナ禍の真ただ中、地球規模での災難に見舞われております。ロシアの暴挙と核の脅威、世界的な天候異変（洪水、旱魃・・）、ミサイル、宗教と政治癒着、インフレと円安加速、エネルギー不安、食糧難と物価高、世界分断危機・・・・・、と日々、不安を感じながら、会報編集作業に携わっております。安全と安心できる生活が戻ることを待つのみです。

これから冬本番、会員各位におかれましては、引き続き「自己防衛」され、来夏の総会でお元気なお姿を拝見できればうれしく思います。

広報チームよりのお願い：

次号（34号）へのご投稿をお待ちしております。

会員相互の情報提供、随筆、エッセイ、珍譚奇譚、書評、同好会・同期会・OB会開催報告、アーカイブス写真（各種会合、仕事関連、課外活動等）、往年のロマンス、経験談、旅行記等、これまでの各号の掲載内容を参考にされ、ご投稿いただきますようお願い致します。

一方、ホームページの「ふれあいの広場」欄に、①「旅行」②「花や景色」③「読書感想文」④「温泉情報」⑤「健康」⑥「趣味」⑦「美味しい食べ物の店や食べ方」の7つのジャンルを設けておりますので、内容をご覧の上、随時ご投稿ください。

尚、お写真、直筆原稿などは、奥村あて郵送していただければ当方でスキャンし、PCなどに保管、用済み後に返却いたします。

●投稿文・写真など送り先、問合せなど ⇒

郵送の場合 ⇒ 〒349-0141 埼玉県蓮田市西新宿3丁目115番19

●会報次号（34号、2023年06月1日発行予定）へのご寄稿の締め切り

⇒ 2023年4月30日（日）

（奥村 睦夫）

ニチメン東京社友会

〒100-8691 東京都千代田区内幸町2-1-1
飯野ビルディング8F

会報発行人：石原 啓資

編集担当・広報チーム

リーダー：奥村 睦夫

メンバー：入江 隆史 中田 龍彦 森田 淑子

印刷所：有限会社 関内印刷